

# フィリピン

平成5年2月9日～2月18日

社団法人 全国農村青少年教育振興会



## I 調査目的

### 1. 調査目的

「21世紀のための友情計画」青年招へい事業によって来日した、フィリピン青年との交流をさらに発展させ、その友情関係を永続的に深めることを主目的としているが、本調査団は、フィリピン国の学生、農村青年を受入れた経験のある者等で構成され、農業経営者もしくはその関係者であることから、同国の農業の現状と今後の課題についても把握・調査する。

### 2. 調査内容

青年招へい事業の帰国青年に対する影響、また、本事業に関する彼らの要望等や、来日青年の同窓会組織(Philippine Asian-Japan Friendship Association for the 21st Century 略称 PAJAJA-21 以下、PAJAJA)の活動状況と今後の展望、また、フィリピン国の農業や農業技術研究・教育等の現状と課題などについて、次の内容により調査した。

- (1) 日本大使館表敬訪問
- (2) 外務省表敬訪問
- (3) PAJAJAの活動状況説明
- (4) フィリピン稲研究所(Philippine Rice Research Institute 略称 PHILRICE 以下、PHILRICE)視察
- (5) 国際稲研究所(International Rice Research Institute 略称 IRRI 以下、IRRI)視察
- (6) アラネタ大学学長表敬、実習農場等見学
- (7) ピナツボ火山被災状況等見学
- (8) セミナー開催
- (9) 調査団主催パーティー、昼食会の開催

### 3. 調査団員

職務	氏名	住所・所属先等
リーダー	高橋 浩進	〒029-56 岩手県和賀郡沢内村猿橋25-7 岩手県農政部農村振興課技師 地方プログラム実務担当者
メンバー	高野 司	〒023-11 岩手県岩谷堂字五位塚104 農業 ホストファミリー
メンバー	吉田 一義	〒923 石川県小松市長田町リ21 吉田農園専務 ホストファミリー
メンバー	菊池 重徳	〒880-02 宮崎県宮崎郡佐土原町下那珂389-67 ミヤザキバイオファーム(株)専務取締役 宮崎協力協会

## Ⅱ 調査結果

### 1. 調査日程

日順	日	時	業務内容及び訪問先
1	2月9日(火)	9:40	成田発(JL741)
		13:30	マニラ着
		15:00	ホテル「チャーターハウス」チェックイン
		15:30	JICAフィリピン事務所との打合せ
		16:30	(同事務所飯島所長表敬)
		17:30	日本大使館訪問(池田一等書記官表敬)
		18:00	ホテル「チャーターハウス」泊
2	2月10日(水)	9:30	外務省訪問(マラシガン北アジア課長表敬)
		10:30	PAJAF Aの活動概要説明及びスタッフとの打合せ
		12:00	PAJAF Aスタッフ、マラシガン課長と昼食(外務省内)
		13:00	ムニョスへ出発(PAJAF Aのフィデル・ギドーテ同行)
		17:00	ムニョス(フィリピン稲研究所“PHILRICE”)着
		17:30	PHILRICE主催のカクテルパーティー 同上泊
3	2月11日(木)	9:00	PHILRICEロニロ副所長表敬及び概要説明
		10:00	PHILRICE圃場及び近隣農家見学
		11:30	昼食(PHILRICE内)
		12:30	パンパンガ出発
		15:00	パンパンガ着、プロジェクトGENESISフェリックス代表表敬 ピナツボ火山の被災状況視察
		16:30	マニラへ出発
		19:30	マニラ着 ホテル「チャーターハウス」泊

日順	日	時	業務内容及び訪問先
4	2月12日(金)	8:00	ホテル出発(PAJAFA フィデル・キド・テ、エース・ケル同行)
		9:00	アラネタ大学着、マヌエル・プンザラン学長表敬
		9:30	同大学研究室、実習圃場見学
		12:00	昼食(同大学実習圃場)
		13:00	出発
		13:30	マニラ市内観光(園芸展示会、デパート)
		18:00	PAJ A F A 副会長ホセ・セバ・リス宅にて歓迎パーティー ホテル「チャーターハウス」泊
5	2月13日(土)	9:00	ホテル内でホストファミリーとの顔合せ
		9:30	各家庭へ出発 ホームステイ
6	2月14日(日)		ホームステイ ホテル・ニッコー・マニラ・ガーデン泊
7	2月15日(月)	10:00	セミナー「農業開発と青年」(JICA事務所内)
		12:30	調査団主催昼食(JICA事務所ビル6階エグゼクティブ・ラウンジにて)
		13:30	セミナー
		16:00	市内観光(デパートなど)
		18:00	夕食(セミナー参加青年をまじえて) ホテル・ニッコー・マニラ・ガーデン泊
8	2月16日(火)	9:00	ロスパニョスへ出発
		10:30	ロスパニョス着、国際稲研究所“IRRI”訪問、見学
		12:00	昼食(IRRIにて)
		13:00	タガイタイ市へ出発
		15:00	観光(タール湖など)
		16:00	マニラへ出発
		17:30	マニラ着
		19:00	調査団主催カテルパーティー(ホテル・ニッコー・マニラ・ガーデン・ハイビスカスにて) ホテル・ニッコー・マニラ・ガーデン泊

日順	日	時	業務内容及び訪問先
9	2月17日(水)	10:00	マニラ市内観光 (PAJAJA イバン・ガリ・ラス、エース・ケル同行) サンチャゴ要塞、マラカニアン宮殿見学
		12:00	朝食 (中華料理店にて)
		13:00	市内観光
		15:30	JICAフィリピン事務所へ報告
		16:30	日本大使館報告
		19:30	さよならパーティー (ジョセフィン) ホテル・ニッコー・マニラ・ガーデン泊
10	2月18日(木)	11:00	ホテル発
		11:20	JICAフィリピン事務所打合せ
		12:30	マニラ国際空港着
		14:40	マニラ発 (JL742)
		19:30	成田着

## 2. 主要面談者

JICAフィリピン事務所 飯島 正孝 所長  
 荊木絵美子 職員

日本大使館 池田 拓哉 一等書記官

フィリピン国外務省 Ms. SYLVIA MARASIGAN  
 (Director, Northeast Asia Division)

PAJAJA Ms. EVA LAWAS (President)  
 Ms. NANETTE LOGARTA (Vice-Pres.)  
 Ms. JOSELYN ALEGRE (Board Secretary)  
 Ms. WINNIE ROSA (Asst. Secretary)  
 Ms. JOY LEON (Public Relations Officer)  
 Ms. FILIPINAS RICAMORA-ROJO  
 Ms. NYMPHA MANDAGAN

Ms. KARINA VISTAN

Ms. EUNICE QUEROL

Mr. FIDEL GUIDOTE

PHILRICE

Mr. RONILO BERONIO (Deputy Director)

PROJECT GENESIS

Mr. FELIX VELASQUEZ

(President, Biodynamaic Agribusiness Corporation)

ARANETA UNIVERSITY(AU)

Mr. MANUEL PUNZALAN (President of AU)

セミナー参加者

Mr. ERWIN CABRIDO

Ms. FLORENCIA CALING

Ms. GLORIA CARILLO

Ms. OFELIA FERNANDEZ

Ms. JOSEPHINE LAGMAY

Mr. BENJAMIN QUE

Mr. MICHAEL ANGELO SILOS

Ms. ERMA TABUENA

Ms. TERESA TAMAYO

IRRI

Mr. GRAEME QUICK

(Head, Agricultural Engineering Division)

### 3. 調査結果概要

- (1) 本事業の同窓会組織であるPAJFAは、全国を網羅した組織強化の課題が残るものの、ピナツボ火山被災地へのボランティア援助など、独自の活動には目を見張るものがあった。また、我々調査団を快く受入れ、過分なもてなしをいただくなど、感謝の念にたえない。
- (2) 農業研究機関や農家など、フィリピンの農業を垣間見ることができたが、この国の社会・経済全体の諸課題と当然リンクしており、農業だけでは解決できないものばかりであった。また、この国の農業政策が農民にうまく伝わらない印象を受けたが、これは、国が農業技術者の養成に力を入れてこなかったことが原因と思われる。
- (3) JICAの各種事業はフィリピンでも大きな成果を上げており、本事業により来日した青年も各地で活躍してるやにお聞きした。しかしながら、このような成果が日本国民にはうま



く伝わっていないように思える。

- (4) 今回の調査において、両国の国情に違いはあるものの、特にP A J A F Aのメンバーとは十分な交流が図られたと自負しており、今後とも継続していきたいと考える。

#### 4. 現地調査・活動内容結果

##### (1) 訪問先における本件事業に関する意見交換の内容

###### ア. フィリピン国外務省

いかにもキャリアウーマンという感じの、マラシガン北東アジア課長（Director MARASIGAN）と意見交換を行った。

彼女は、本事業の成果として、両国の友情関係を深めることに対しての功績が大であること、国内のあらゆる産業の技術発展に寄与していること、などの点について評価している。今後の課題としては、コミュニケーションをより深く図る意味から、ホストファミリーには英語の話せる者が少なくとも一人いる家庭が望ましい、とのことであるが、いずれにしろ、「青年招へい事業の継続を強く望んでいる」と話していた。また、国として、日本をはじめ他国へ研修等に多数派遣しているが、この者たちが、帰国後、あらゆる分野で活躍していると、感謝の意を表わしてくれた。

調査団からの「日本では、欧米各国から英語教師を招き入れる制度があるが、フィリピンもこの制度を活用できないか？」という問いには、同様の制度を日本に対して要望したいとのことであった。

###### イ. P A J A F A

エバ・ラワス会長（President LAWAS）ら、P A J A F Aの役員からは、本事業の継続実施を前提に、地方プログラムの期間（特に、ホームステイ）を長くして欲しいこと、プログラムがいくぶんハードであるなどの意見を聴いた。

また、セミナーに参加して青年ら（いずれも、P A J A F Aのメンバー）は、訪日前の研修において、日本語会話の時間を増やして欲しいこと、来日プログラムの内容を事前に参加者に対して充分周知させて欲しいこと。加えて、農業関係の学生チームは、農業関係団体が受入れることになるが、フィリピンの大学では、一般に漁業が農学部に属しているため、チームを編成した場合、漁業専攻の学生も入るケースがあることを受入れ側に認識しておいて欲しい、という意見もあった。

###### ウ. J I C A事務所

マニラ空港に降り立ち、ホテルにチェックインした後、予定より遅れて、J I C Aフィリピン事務所を訪問した。

まず、担当の荊木絵美子職員から、私たち調査団が農業関係者であることに配慮してアレンジしていただいた、本調査プログラムの説明を受けた。

その後、飯島正孝所長との懇談の中で、本調査プログラムが充実したものであるとの彼の評価や、見どころ（IRR I、ピナツボ火山被災地など）やPAJ AFAの活動が活発に行われていることなどが話題となった。また、この国では現在、電力不足から午後1時から6時まで計画停電を強いられていることに触れ、日本ではどんな作業機械でも「定期点検」を行うことが常識であるが、「壊れるまで使う」のが当たり前で、「壊れてから問題に対処する」という、この国とのメンテナンスの考え方の違いを指摘していた。

JICA事務所訪問後の日本大使館へ表敬する予定が、大幅に遅れてしまったことを心配すると、荊木職員が「フィリピンでは、4時と約束したら、4時00分から4時59分までに行けばいいということですから」とさりりとこたえていたのが印象に残っている。

#### エ. 日本大使館

荊木職員にアポをとってもらい、厳重な警備の大使館の中に入る。エレベーターは外部から襲撃を受けた場合、直接オフィスまで登ってこれないように、2階で乗り換えなければいけない。やっとオフィスにたどりついて、池田拓哉一等書記官にお会いする。彼は建設省から出向して来られた方で、JICAの飯島所長さん同様、この国のフォーマルな衣服である「バロン」を見につけている。真っ黒に日焼けした顔と落ち着いた語り口調の池田一等書記官と、次のようなことが話題となった。

青年招へい事業によって、外務省の職員も毎年1名くらい参加しているが、日本の関係者が温かく迎え入れ、親身にお世話していただいたおかげで、訪日前よりも彼らは日本に親しみを覚え、よき理解者となり、大使館との業務もスムーズに進むので、感謝しているとのことである。また、今回の我々調査団のプログラムがハードスケジュールである、とのアドバイスもしていただいた。

大使館では、いろいろな催しを行っており、日本語教室や日本のアニメーション上映会（「はたしのゲン」など反戦ものが多かった）などを開催し、日本理解に努めているようである。

#### オ. PHILRICE

JICAのプロジェクトで設置されたPHILRICEには、予定時刻を大幅に遅れ到着したが、このりっぱな宿泊施設にチェックインしてすぐ、屋上での歓迎パーティーに招かれ、研究所の職員十数名と懇談することができた。ここには、高橋博士はじめ5名の日本人研究員が活躍している。

翌日、ベロニオ副所長（Deputy Director BERONIO）らから、研究所の概要について説明していただいた。同様の研究施設として先に設置されている、あまりにも有名なIRR

Iと一線を画している点は、水稻の品種開発に主眼を置いていることと、国の技術普及関係職員を配置し、農業者研修に力を注いでいることにある。

研究所は、私たちの訪問した中央試験場がムニョスにあり、他に4つの支場がある。セクションは大きく分けて、予算管理部、研究部、技術普及部の3つあり、メインとなる研究部は、育種・生物工学科、土壌・生理学科、作物防除科、水稻機械科、社会経済・統計・農政科、水稻化学・食物化学科で構成される。また、技術普及部には、政府職員も配置されている。

一方、ここの研究員は、研修のため頻繁に来日しており、私たちが訪れた際にも、今年6月に3名の研究員がつくばと九州農試へ赴くことを聞いた。JICAのプロジェクトが、多方面に渡って展開され、それぞれ実を結んでいる様子を理解することができた。

#### カ. PROJET GENESIS

PHILRICEのあるムニョスからパンパンガへ向かう。そこは、かの有名なピナツポ火山噴火の被災地である。道路も家もほこりっぽい感じがする。乾期のため、車が通ると火山灰が舞い上がるので、ハンカチで口を押えている通行人が多い。

被災農家を援助しているNGO（非政府機関）組織PROJECT GENESISのオフィスがあるバサ空軍基地へ車を走らせる。途中、噴火による泥流で埋めつくされた川（幅百メートルくらい）を見た。ここが川だとはとても思えない。地形が著しく変わってしまっており、雲仙・普賢岳の比ではない。そこでは、黄土色の泥をパワーショベルで取り除いているのだが、おびただしい量の泥を全部処理することは不可能であろう。しかし、これから季節が雨期に変わると、雨水は行き場を失い洪水が起こることが懸念されると言う。

泥で埋めつくされた川を車で横切った際、大きな水たまりの真ん中で、車が立ち往生してしまうというアクシデントに見舞われながら、何とかバサ空軍基地内のPROJECT GENESISのオフィスに到着した。ここで、代表のフェリックス氏（President FELIX）と会見する。彼は、バイオ関係の農業関連会社の社長で、火山灰が何メートルも積もった農地における農作物の生産技術を開発していた。技術と言っても、彼の会社で開発した有機物を10アール当たり200～300キログラム投入するだけのようであるが、フェリックス氏はこの技術のすばらしさを高らかに自慢する。水稻や野菜など、普通の水田や畑よりも収量が上がり、品質も良いというのだ。彼の業績は賞賛に値するが、いささか眉ツバものである。

彼はまた、事業家として、相当の野心を持っているようだ。ピナツポの話が終わった後、フィリピンの将来の農業関連産業発展のアイデアをレクチャーしてくれたが、フィリピンが日本に安全でおいしい食糧を輸出するかわりに、日本が農業機械をフィリピンに提供してくれ、などという、たいへんムシのいい話をしてきた。

帰り道、被災住民のいくつもあるキャンプのうちの一つを見た。粗末な小屋が立ち並ん

でいるその隣では、ブルドーザーが整地作業を行っている。さらに多くの被災住民を受け入れる準備をしているのだろうか。ボロボロの衣服の被災者から、彼らの苦悩がひしひしと伝わってきた。

#### キ. アラネタ大学

ケソン市にあるアラネタ大学を訪れた。若人が集う、活気あふれる大学の雰囲気はどこでも同じである。しかし、学舎は、近代的で無機質な日本のそれとは違って、歴史ある重厚な造りという感じがした。ここで、マニユエル・プンツァラン学長（President PUNZALAN）を表敬訪問する。彼は、訪日経験が豊富で、大の親日家であると語り、多忙にもかかわらず、我々を快く迎えてくれた。

キャンパス内を見学させていただいたが、ココナッツゼリーなどの食物加工の研究や作物のウイルスフリーについての試験は非常に興味深かった。その後、大学から車で20数分かけて、山間の付属農場に案内された。63ヘクタールの農地にマンゴなどのトロピカルフルーツの樹木が多く植栽されており、学生はこの農場での実習を義務づけられている。農場内を見学した後、フィリピン料理の昼食で我々をもてなしてくれた。彼らから勧められ、見よう見まねで、手を使って食べたりもした。

アラネタ大学は、アラネタ財閥の設立した大学で、3千人の学生が学んでおり、授業料が年間5千～6千ペソ（約2万5千～3万円）とのことである。フィリピンの農業系の大学は、思ったより多く、大中小あわせて、287校あるが、レベル的にもピンからキリまでであることから、州毎に指定校を設置し、レベルアップしようという条例が国会に提出されたそうである。

また、案内していただいた教授から、フィリピン農業の課題として、中間産業（加工業）の開発、自給率の向上、農地の有効活用が重要であることを聞いたが、大学の教官を交えた、学生たちとの交歓会は非常に楽しかった。

#### ク. I R R I

今回、アセアン諸国では国際的な総合研究開発機関として、最も進んでいるIRRIも訪問したが、ここの研究内容は非常に充実しており、世界の農業試験場に研究成果を伝播し、これまで稲作の生産量増大に大きく寄与している。

我々は、農業機械部長のクイック博士（Dr. QUICK）とお会いした。マイコン制御の何百万円もする日本の高価な農業機械を、遠回りに批判しながら、東南アジアの農家が手軽に入手し、使用できることを主眼に置いて、農業機械を開発されていることを説明してくれた。

つまり、日本のハイテクづくめの農業機械も、先進国では参考にはなるが、発展途上国

ではあまり役に立たない、ということである。

IRRIの職員の中にも、本事業によって訪日した青年がいて、彼らとも昼食をとりながら懇談することができた。彼らにとっても、日本滞在は、忘れることのできない思い出である、と話してくれた。

## (2) 帰国青年の同窓会などの活動状況

### ア. 組織と運営

帰国青年同窓会であるPAJAF Aは、フィリピン国内で「21世紀のための友情計画」青年招へい事業により訪日した経験のある青年で組織されている。役員は選挙で選任され、92～93年度の会長は、エバンジェリナ・ラワス（President LAWAS）女史である。

92年度の会員は約1,250名であるが、実際に参加活動しているのは約半数とのこと。運営資金は年会費が主な財源で、資金不足が問題である。

### イ. 活動状況について

月一回の例会をマニラで開催し、事業の企画立案及び具体的内容の協議決定を行っている。92年度の主な活動内容は次のとおり。

- ① 本事業で来日予定の青年の日本出発前研修指導
- ② アフターケアチームの日程調整と受入れ
- ③ A J A F A (Asian-Japan Friendship Association for the 21st Century) との合同事業への参加、及び独自プログラムの企画
- ④ 災害地・被害者への救済・救援事業の実施
- ⑤ 会員相互の連絡協調のためのニュースレター（機関紙）の発行
- ⑥ 活動資金調達活動

### ウ. 今回のアフターケアチーム受入れ

2月10日：エバ会長ほか3名による、フィリピンの概要とPAJAF Aの活動内容説明および意見交換。

11日：フィデル（Mr. FIDEL GUIDOTE）PHILRICE及びPROJECT GENESISの同行。

12日：フィデル及びユニス（Ms. EUNICE QUEROL）、アラネタ大学及び同大学農場視察に同行。

PAJAF Aメンバー約15名、ボンセヴィク同会副会長（Vice-president PONCEVIC）宅での歓迎パーティー参加。

15日：農業関係PAJAF Aメンバー9名によるセミナー。

16日：アフターケアチーム主催のカクテルパーティーに、関係者約30名参加。

16日：エバ及びユースがマニラ市内の観光案内。

さよならディナーへPAJAFAMEMBER約15名参加。

#### エ. PAJAFAMEMBERと交流して

主に役員の皆さんとの交流であったが、それぞれ、弁護士、ジャーナリスト、教師、政府関係職員と、これから国を背負って立つであろう諸氏の、いたれりつくせりの対応であった。資金不足のなか、ほぼボランティアに近い彼らの熱心な活動が高く評価され、今では政府からも信頼のある組織として認められていると聞き、敬意を表すると同時にたいへん心強く感じた。

一方、国情からしてやむを得ないと思うが、その活動に主たるメンバーや場所が首都メトロマニラ中心で、しかも50人ほどのメンバーに限られていることも忘れてはならない。島々の多い地理条件ではあるが、地方にも下部組織が整備され、近い将来、真にこの組織が底辺まで浸透した、効果的なものになるよう願わずにはいられない。

お世話いただいたPAJAFAMEMBERの皆さんに深く感謝すると同時に、さらなる活躍をお祈りします。

### (3) 現地でのセミナー、交流会の実施結果

#### ア. セミナー

「農業開発と青年」というテーマがすでに設定されており、フィリピンに到着するまでは、我々は助言者か意見者くらいの立場なのかと考えていた。ところが、到着後、アフターケアチームで具体的な論点を決め、進行しなければいけないことがわかり、慌てて進行方法など詳細について打合せ、セミナーに臨んだ。

フィリピンの青年が戦後急発展を遂げた日本に興味のあることが、セミナーを通じて伝わってきた。

セミナーは、調査団個々の農業観を通して日本の農業を紹介することから始めた。そこから、フィリピンにおける農業の課題・問題点をどのように解決していったらいいか意見を交わしたが、このセミナーに参加していくつかのことを感じた。

まず一つは、日本以上の行政と国民（農業者）との隔たりが大きいということ。それは、行政（この場合は農業指導者）の意見を、農業者が素直に聞き入れないのである。技術指導を行っても、農家の方がそれをすんなり実行してくれないらしいが、農業者が求めるものと行政が行おうとすることにズレがあるように思える。また、農業者（労働者）と行政（技術指導者）との間に壁のようなものを感じた。これは、階層の違いというものなのか？日本においては、この階層なるものがなく、みんながほぼ同じレベルで、対等に人間同士

のつきあいができるのに、この国にはむずかしいことらしい。

もう一つは、日本に対して技術・資金力において、助成願望が強いこと。まだ、日本のパートナーとしてのレベルに達していないように思える。同等のつきあいをしたいのだが、日本あるいは日本人に対して、同等以上の目で見ていることが多いように感じた。

しかし、フィリピンの人たちは、ある意味で日本を手本としながら、独自の良い国を作ろうと一生懸命に考えている。日本同様、火山国であるが、その被害に頭を悩ませながらも、産業をおこそうと努力している姿が、セミナーでの発言からも伺えた。

#### イ. 交流会

交流会と称するような大きなパーティーは、2月12日のPAJAF A主催の歓迎パーティーと、2月16日の調査団主催カクテルパーティーの2回開催された。その他に、我々の調査に同行してくれたPAJAF Aのメンバーかと何度か夕食会や昼食会を行った。

2月12日の歓迎パーティーは、PAJAF Aの副会長を務めるポンセヴィク氏(Vice-President PONCEVIC) 宅で行われた。参加者は、その後の日程でお世話になったホストファミリーの方々やPAJAF Aのメンバー約15名である。ホームパーティーの雰囲気の中、なごやかなムードで進められ、心中にあったホームステイへの不安もやわらぎ、逆に期待がふくらんでいった。

また、2月16日の調査団主催のカクテルパーティーは、外務省やJICAの関係者、PAJAF Aのメンバーの方々を含め、約30名で開催された。ホストファミリーも参加し、何回か顔を合わせているおかげで、会話ははずみ終始楽しく過ごすことができた。

その他、2月10日のPHILRICE関係者との夕食会や、2月12日のアラネタ大学実習農場での昼食会、2月15日のPAJAF A会長らとの昼食会及び夕食会。そして、フィリピン滞在の最後の夜2月17日、ホストファミリーやPAJAF Aの数名のメンバーとフィリピン料理を食べながら滞在中のできごとを話したり、バンブーダンスに挑戦して、最後の夜を楽しんだ。きっとまた、フィリピンへ同じメンバーで来ると約束しあい夜がふけていった。思い出に残る毎日だった。

#### (4) ホームステイ実施結果

団員それぞれについて記述する。

##### ア. 高橋 浩進

私のホームステイ先は、PAJAF Aのメンバーで、ケソン市在住のアイダ・エスカラさん (Ms.AIDA ESCALA) 宅である。86年にJICAの青年招へい事業で訪日し、神戸にホームステイをしたとのこと。彼女は、母親がインド人のハーフと言うだけあって、インド系の美人で、名門フィリピン大学で経済学を専攻した才媛である。現在、中国銀行

に勤務しており、家族は、5年前に結婚した、その風貌からスペイン人の末裔と思われる設計士で夫のロニーと、2歳8カ月になる息子のディビスに、メンドが2人とバブルとシュガーの犬2匹である。この夫婦は共稼ぎで、二人とも毎日マカティ地区にあるオフィスへ通勤しているとのこと。月給は、二人合わせて日本円で10万円弱と推測される。

家は、平屋建てで、12畳くらいの居間、8畳の台所に、6～8畳の部屋が3つ、トイレ、シャワールームといったところだ。私が泊めていただいたのは、6畳位の小部屋であった。50～60平方メートルの庭に、犬小屋とバスケットボールのゴールがある。これで、中上流の部類に入るだろう。

ホールスティの1日目朝、彼らがホテルまで迎えに来てくれた。簡単なあいさつと自己紹介を済ませ、車にスーツケースを積み込み、ホテルを離れた。車はというと、2年前に購入したという三菱ランサーの中古車である。ロニーは車の盗難をひどく警戒していて、車を離れるときには必ず、ハンドルに鍵付のバーをつけてロックするほどの用心ぶりであった。

ホストファミリーへのおみやげは鬼剣舞のこけしと、アイダには染物のハンカチ、ロニーには世界アルペンのTシャツ、ディビスには鬼剣舞の小さな面、それからメイドたちには、薙玉の人形を持っていった。みんな大変喜んでくれた。

さて、彼らには、いろんな場所を案内していただいた。デパートやフィリピン大学、ケソン記念公園などなど。その中で印象に残ったのは、まず、フィリピンの夕日のきれいなこと。盛岡でも見ることのできない美しさであった。空気がすんでいることもあるだろうが、南国の太陽が沈んでいく様にしばし見惚れていた。

また、近くに住むアイダの両親ともお会いできた。彼女は5人兄弟の長女で、両親とは既婚と独身の弟が同居していた。そこで、アイダの甥（5～6歳）が、私が日本人とわかると、何かのポーズをとって見せた。聞けば、マスクライダー（？）の変身ポーズだと言う。この国では今、テレビで「仮面ライダー・ブラック」を放送している。

それから、彼女が講師を務める課外大学（？）を見学した。この大学は、ちょっと変わっていて、マニラ市内の大学生を対象に夜、講師されており、「幸せな結婚とその生活」を得るために、グループで討議しながら考えを深めていく、というものである。グループ討議をかたわらで見学している時、コーディネーター的役割のアイダから、「浩進、日本では離婚は多いですか？」と突然きかれて、思わずうろたえてしまったことを思い出す。

一番、印象に残っているのは（彼らには非常に感謝しているが）、あるレストランに連れていってもらった時のこと。そこでは、ウェ이터、ウェイトレスが全員歌手なのである。フィリピン料理をいただいている間中ずっと、フィリピンの歌がアコースティックの伴奏とコーラスで演奏されていた。ウェ이터たちがテーブルとテーブルの間に立って歌う様子は、まるでミュージカル上演中に、客席ではなくて、ステージ上の出席者たちの隣に座っ



て聴いているような感じで、とてもエキサイティングであった。

息子のディビスは、最初私の顔を不思議そうにじっと見ていた。どうしてか、とアイーダに尋ねると、彼は、眼鏡をかけている人を近くで見たことがないらしく、私をとて珍しがっているとのこと。私が眼鏡をはずすと、かけろ、とディビスがだだをこねる。かけると、大喜びする彼の愛らしい姿が目につく。

短い時間だったが、温かいもてなしをうけながら、フィリピンの家庭の味を知ることができた2日間であった。将来、彼らが日本を訪れた時は、私の家に招待することを約束して、別れを告げた。

#### イ. 高野 司

2月13日、朝食がほぼ終わる頃、ホテル「チャーターハウス」に、ホストファミリー、アーノルド氏 (Mr. ARNOLD ELEFANO) が迎えに来てくれた。彼はマニラから南へ60 kmほどのロスバニョス市に住んでいる。私以外の団員のホームステイ先は皆マニラ周辺で、私一人だけが遠隔地であった。そのため、彼は朝6時に起き、車を飛ばしてきたという。緊張のあまり、挨拶する私の声が少し上ずる。

海外旅行は比較的慣れている私だが、こと外国の一般家庭に一人で泊まるとなると、やはり不安である。アーノルド自信、5年ほど前にJICAの事業で日本を訪れている。日本のホームステイを経験している彼は、英語の不得意の私に「心配いらない」と気を使ってくれた。彼は現在、ロスバニョスにあるIRRRIに勤務し、農業機械の開発を担当しているエンジニアである。

1時間ほどでIRRRIに到着した。そこには、彼の部下で、ジャスパーと、やはり本事業で昨年青森を訪れたウェリンの二人が迎えてくれた。施設内を案内していただいた後、その二人も一緒にアーノルド家へと向かった。町から3 kmほど離れた、緑多い静かな住宅街にある彼の住まいは、IRRRIの官舎である。棟つづきの官舎ではあるが、二階建てのけっこう広い住宅であった。

家族はアーノルドと奥さんマリエ、母親のロシエ、息子のアンジェロで、白人に近いスペイン系。それにメイドの5人家族であった。挨拶を交わしてさっそくランチ。手作りの豪華なフィリピン料理である。かたこと英語を駆使しながら、おいしいごちそうをいただいた。アンジェロはそちこち動き回り手がかかる。やはり男の子、こればかりは万国共通である。

午後早速、バグサンハン観光へ出かけた。バグサンハンの溪谷では、船頭1人客2人の小舟で舟下り(川上り)ができる。ゆったりと舟を進め、ジャングルを過ぎると、いよいよ急流となる。水しぶきが容赦なく頭上から襲いかかり、あちこちから悲鳴がおきる。終着地が大滝となっていて、衣類びしょ濡れの往復2時間である。楽しくもハラハラの舟下

りであった。ただ、まいったのは私が日本人であること。流れが穏やかになると、他の舟にはぜんぜん寄りつかないのに、どこからかもなく私の舟にだけ、お土産売りが来るのである。おまけに船頭は櫂を止める(?)私はいさぎよく「ネギをしょったカモ」になるのである。

バクサンハンの後、ラグナ湖の周辺をドライブした。途中、湧き水の多い所だろう、ほぼ原始時代さながらの生活をしている数カ所の集落を見た。同じ国内なのに、文明社会とのあまりにもかけ離れたその様に、私は向けたカメラのシャッターを押すことはできなかった。

夜、アーノルド夫妻と私の三人は、ロスバニョス市カレッジロータリークラブ主催のバレンタインデー・ダンスパーティーに招待された。そこには大きな屋根だけの、集会場のような所で、近くには高校や大学が隣接しており、若者男女100名ほどがにぎやかに踊っていた。お年よりの多いのが日本と違う。我々はマリエが妊娠3カ月(2人目)であるため、かるく一回踊っただけで、もっぱら食事とビールに専念した。10時半、家に戻ったらマリエの妹のミアが遊びにきていた。マニラで医師をしている彼女は、私がホームステイするというので、わざわざ来たらしい。

私の部屋は二階の一室。マリエの書斎(趣味で紙製のバッグ・装飾品などを作っている)を提供していただいた。明るく風通しもよくきれいな部屋であった。

2月14日、ウエスタンの朝食を、ミアも含め6人でにぎやかに取った後、わたしが土産で持っていた折り紙をみんなで作る。「鶴」を教えたのだが、アーノルドは途中でりタイヤ。マリエとミアは完成。悔しいかなマリエは私よりもきれいな出来上がり!

今日は家族みんなでピクニックである。玄関で記念写真を撮り、午前9時、水筒を持って出発。名残惜しくもミアは仕事のため、途中でバスに乗り換えマニラへ戻った。

さて、行き先はサンパブロ市の「エスクデロ植物リゾートガーデン」である。そこは植民地当時から代々受け継いでいるスペイン人経営の農場で、ロスバニョスから南東へ約50kmにあり、名称にあるとおり手入れのいきとどいたガーデンのほか、博物館・プール・自家発電のダムまでであるという、たいへん大きなものである。

空は晴天であるが、園内はうっそうと茂るヤシの木陰でまったく暑くない。博物館を見学し、水牛の引く馬車(牛車かな?)にのんびりと乗り、しばし過密スケジュールを忘れさせる。

昼食は川の中! そう川の中なのです。ダムのすぐ下、水深5cm位の川にテーブルが並べてあり、バイキング方式の食事をとった。

靴を脱ぎサラサラとした流れに足を入れての食事は、何とも風流である。アーノルドに「こんな商売日本でやってみたら? 儲かるよ」と言われ、つい私は「考えてみよう」と言ってしまった。極楽気分の4時間がアッという間に過ぎてしまう。

午後2時。今日は8時までにはホテルへ帰ればいいのだが、そうもいくまい。マリエは3カ月、おばあちゃんもアンジェロも疲れているに違いない。まして、ここからマニラまで往復4時間はかかる。私は帰路につくことにした。

ホテルに午後4時到着。「夕食でも」と言われたが、帰りを考えお断りした。「アーノルド、マリエ、おばあちゃん、どうもありがとう。いつか日本にも来てください。アンジェロ元気でネ」 あっけなくも、名残惜しい別れだった…。

私にとって初めての外国でのホームステイ。ご家族の暖かいもてなしと、素晴らしい観光、そしていろいろな体験と大変有意義なものであった。しかし、同時に何か心残りがあるのも事実である。たぶん、わずか一泊二日では観光中心になりがちで、ゆっくりその家で過ごすとか、近所の人々と接することができなかったこと。また、上下の差がはっきりしているこの国の悲しさなのであろうか、アーノルド家の場合も、メイドは一緒に食事せず、私は名前さえわからず帰ってきた。

そうか、またいつかアーノルド家を訪問しよう。

そして、今度こそ彼女の名前を聞こう！

#### ウ、吉田 一義

私はマニラ近郊のマリキナ地区に住んでいる、ジョジ・アレグレさん(Ms.JOJI ALEGRE)宅にお世話になった。家族構成は、ジョジ(長女)、ボーン(長男)、アン(次女)の三人といとこ2人の5名で、父母は仕事のためルソン島北部に別に住んでおり、三女のルースは昨年結婚し日本に在住している。

1日目は、ジョジの他、友人のナニエット、イエニス、ウィニー(すべてPAJAF Aのメンバー)とともに、タール湖とタガタイにある花生産者に向かってドライブした。私も花を生産しているため、このプログラムは非常に興味深かった。そこには、アンスリウムやバラ、菊などの切花を作っており、マニラへ出荷しているそうである。フィリピンでは花は高価なもので、パーティーなどは花の飾りつけの量で、その善し悪しがわかるくらいだという。今回、私はこの花生産者を見学できたのだが、通常は断られるらしい。ナニエットの知人であったため、わざわざ私のために便宜を図ってくれたのである。前日から、どこに行きたいかという、私たち調査団の希望を彼らに尋ねられたが、このように気を配ってくれたことに、とても感動した。

また、帰りがけに、昼食でキノコバーガーなる変わったハンバーガーを食べ、その後タール湖付近の道路沿いの果物屋で、いくつか熱帯果実を買いこみ、みんなで湖をながめながら食べた。食べながら日本語とタガログ語を交えながら、お互いに楽しくすごした。

それから、ウィニーの知人の車屋さんにも立ち寄った。ダウンタウンにあるこの店には、日本人が結婚して住んでおり、彼女らは、この人に私を会わせようと連れてきたのである

が、ちょうど、彼が外出をしていて会うことができなかった。その後みんなと別れ、ジョジと二人で一路アレグレ家へ向かった。

家では、二女のアン、長男のボーン、いとこ二人が出迎えてくれた。家は平屋であるが、部屋数は6室とバストイレがあり、私の泊まった室はボーンの部屋で、6畳くらいの広さである。この家屋で、フィリピンでは中流階級くらいらしい。

夕食は、ボーンがすべて作ったらしい。今日は、私が訪問するというので、腕を振って作ってくれた料理はとてもおいしく、かつ見た目もきれいにできていた。中でも、タラキトックという魚の料理は美味しかった。タラキトックは日本の鯛に当たるもので、おめでたい時や、客をもてなす時に出す料理だそうである。これは後から通訳の人に聞いてわかった。

食後はビールを飲みながら、ボーンとアンと夜がふけるのも忘れて日本のことやフィリピンのことを話し合った。

次の日の朝は、みんなで教会へ出かけた。フィリピン人は信教心が深く、ほとんどの人がクリスチャンとのこと。私は、宗教には縁がなかったが、この日のミサには興味があり、一緒にミサに参加してみた。初めての私は、教会内の一種異様な雰囲気の中で3時間を過ごし、信教心の深い人々の中で、私だけ一人浮いているような感じがしたが、貴重な体験であったと思う。

みんなで昼食にファストフードをとった後、記念にフィリピンの詳しい地図が欲しかったので、本屋へ連れていってもらったが、日本でも売っている本もあり、約3分の1の価格で売っているのに驚いた。それから家にもどり、帰る時間も忘れて、みんなと話をしたりカラオケを歌ったりした。

私は高校の時に、アメリカでホームステイをしたことがあるが、今回はわずか1泊2日だったが、思い出に残る時間を過ごすことができた。

#### (5) その他

我々調査団の訪問に対して、ラウス会長をはじめPAJAF Aのメンバーには、温かく迎え入れ、献身的に接待していただいたり、我々一人一人の希望や興味を聞き取り、プログラムに反映していただくなど、心から感謝申し上げたい。

滞在中にこんな出来事があった。ピナツボ火山の被災地にむかう途中、泥流に埋めつくされた河川を横切った際、誤って水たまりの真ん中で車が立ち往生するアクシデントに見舞われた。この時、我々に同行していたPAJAF Aのメンバーが、即座にズボンと靴を脱ぎ捨て、車を押ししてくれたのである。彼の思いやりとその行動に我々一同感激し、感謝の気持ちで一杯であった。また、彼らとの交流会の中で、同じくPAJAF Aのメンバーから、「10年後にまた来てくれ。我々は必ずフィリピンをすばらしい国にするから」との話を聞いた。

前向きで、エネルギッシュな言葉に、思わず応援したくもなった。

我々調査団は今回の訪問により、これまで以上にフィリピンという国を理解し、この交流を継続しながら、何らかのかたちで援助していきたいという、意を強くした。

## 5. 調査団所感および提言

我々調査団が無事フィリピン滞在を終え、多大な成果を収めることができたのは、JICAフィリピン事務所の飯島所長や荊木さん、社団法人全国農村青年教育振興会の藤田業務課長をはじめとした、関係各位のご指導・ご協力のたまものと、心から御礼申し上げます。

今回の訪問においては、我々調査団が農業関係者であることに配慮し、プログラムを作成していただいたお蔭で、身のある研修を実施することができたが、よりいっそうの本調査事業の発展を考えるうちで、次の点について提言したい。

- (1) 調査プログラムは、調査団の意見・希望を十分尊重し、作成いただきたいこと。
- (2) 同時に、調査団を受入れる同窓会組織との調整も十分図っていただきたいこと。
- (3) なお、同窓会組織であるPAJAF Aから、調査団の報告書を閲覧したいとの要望をお聞きしたので、お伝えする。



夕 イ

平成5年2月4日～2月14日  
財団法人 日本友愛青年協会





## 調査チーム派遣概要

### 1-1 調査チームの構成

構 成	氏 名	生年月日	性別	現住所 / 所属先
チーム・リーダー	飯高 潤	S. 31. 10. 20	男	新潟県長岡市愛宕2-2-5 長岡市役所 (ハイブ長岡)
メンバー	小林 洋介	S. 41. 12. 25	男	千葉県柏市豊住4-1-9-102 財団法人日本友愛青年協会
メンバー	永見 恵子	S. 34. 3. 27	女	福井県武生市あおぼ町7-9 家事手伝い
メンバー	小畑 理恵	S. 47. 1. 11	女	広島県安芸郡府中町城ヶ丘10-15 広島修道大学人文学部在学中
メンバー	菅野 直子	S. 43. 3. 1	女	東京都世田谷区奥沢1-6-13 財団法人日本国際協力センター

### 1-2 調査日程

期間 1993年2月4日(木)～2月14日(日)

2月3日(水)

19:00 事前研修会

2月4日(木)

11:00 箱崎の東京エアースィッターミナルに集合

13:55 成田空港出発 (UA-821便)

18:55 ドンムアン空港到着

20:30 サンルートHにチェックイン

2月5日(金)

10:00 JICAタイ事務所訪問・打合せ

12:00 昼食(中華レストラン)

14:00 NYB事務局を表敬訪問

17:00 サンルートHに到着

2月6日(土)

9:00 ホテルを出発

10:00 NYB事務所にてホストファミリーとの面会

その後、各自ステイ先へ

ホームステイプログラム

2月7日(日)

終日、ホームステイプログラム

2月8日(月)

- 10:00 各自、ステイ先から戻る
- 10:20 同窓会役員との懇談会
- 12:00 昼食(同窓生との懇談)
- 14:00 チュラロコーン大学の視察
- 17:00 サンルートHに到着

2月9日(火)

- 10:00 タマサート大学附属サティカセット小学校の視察
- 12:00 昼食(学校の先生方と給食を)
- 13:30 マティチョン新聞社の視察
- 16:00 サンルートHに到着

2月10日(水)

- 9:30 ホテルを出発
- 12:30 ドンムアン空港を出発(TG104便)
- 13:00 チェンマイ空港到着
- 13:30 ロイヤル・プリンセスHに到着
- 14:30 ワット・プラタート・ドイ・ステーブ寺院の見学
- 17:00 ホテルに到着

2月11日(木)

- 10:00 ホテルを出発
- 10:20 チェンマイ大学の視察
- 15:45 チェンマイ空港出発(TG105便)
- 16:50 ドンムアン空港到着
- 18:00 サンルートHに到着

2月12日(金)

- 9:30 ホテルを出発
- 11:00 ワット・ヤイ・チャイ・モンコン寺院の見学
- 12:00 チャオ・サン・プラヤー国立博物館の見学
- 13:00 昼食
- 14:00 ワット・プラ・スィー・サンペット寺院とアユタヤ王宮跡の見学
- 15:00 日本人町跡の見学
- 16:00 バーン・パイン離宮の見学
- 18:00 ホテルに到着

19:00 来日青年との送別会

2月13日(土)

終日、自主研修

18:30 ホテルを出発

19:30 ドンムアン空港到着

22:30 ドンムアン空港出発(UA-822便)

2月14日(日)

6:08 成田空港到着 / 解散

### 1-3 主要面談者

#### ・JICAタイ事務所

阿部信司 所長

三輪哲也 副参事(今回の受人担当)

#### ・NYB(NATIONAL YOUTH BUREAU 首相府青年局)

Ms. URAIWAN PICHITAKUL 事務局次長

Mr. SANEL CHANKRACHANG 国際部長

Mr. WIMOIRAT RATCHUKOOL 国際部職員

Ms. SUREEPORN SEREERANT 国際部職員

他、計5名のJICA招へい事業の担当職員

#### ・同窓会役員との懇談会

Mr. SURAPON PITUCKLIMSKUL 会長

Mr. MONCHAI RAITANA 副会長

Ms. NITINANT WISAWEISUAN 秘書担当

Ms. MUKUDA JANETHANYAWAN 会計担当

Ms. DECHA SIGAVANICH 国際部門担当

Ms. JITJANYA PERMPATR 公共部門担当

Ms. KHAJORN SUSIWONG 福祉部門担当

#### ・チュラロコーン大学

Ms. VACHILA PENROAJ 学生課長

他、1名の学生課職員及び2名の女子学生

#### ・タマサート大学附属サティカセット小学校

Ms. JONGRAK KRAINAM, E.D. D. 校長

他、4名の女性教職員

#### ・マティチョン新聞社

Mr. SERM VONGCHANT 監査委員

Mr. SUWAPONG JUNFHUNGPETCHARA 編集局員

他、1名の社員

・チェンマイ大学

Mr. LUECHAI CHULASAI, PH. D. 副学長

・チェンマイにて

Ms. SUPRANEE NIMMONRAT 92年学生グループ

Ms. JARINRAT LIMCHAROEN 92年学生グループ

・送別懇親会にて

同窓会のメンバー10名、NYBから4名ホストファミリー10名、JICA事務所から担当の三輪さん、及び我々5名、全体で30名で夕食を共にした。

## 2. 調査の要約

今回の調査では、主な目的は招へい青年が帰国後、どのような活動を展開し、また、今年で10年目を迎えようとしている「21世紀のための友情計画」に対する要望を認知することであった。併せて訪タイが初めてのメンバーばかりなので「タイという国」を知ることをもう一つの主目的とした。そして、今回の経験やタイで帰国青年たちとの懇談などを通して、今後の「招へい事業」へ何らかのフィードバックができるように、各訪問地で各自が問題意識を持って調査を行った。

スケジュール的には、期間中を大きく3つに分け、①各方面の表敬訪問および青年局等での懇談、②ホームステイプログラム、③バンコク・チェンマイにおける大学等の見学および青年交流という流れで行った。

① JICAタイ事務所の訪問では、まず、阿部信司所長と懇談し、特に、タイの政治情勢、福祉制度、教育（特に大学進学率）、そして対日感情等の話をして頂いた。その後、担当の三輪哲也職員との日程の打合せを行った。打合せでは、団員全員が初めての訪タイということで衛生面、交通面等、生活上のアドバイスを頂いた。また、プログラムについて若干の変更があり、ホームステイが一泊増え、当日予定されていた日本大使館へ表敬訪問が延期となった（結果的には中止）。NYBの表敬訪問では、帰国青年の日本についての感想や帰国後の活動、青年局の招へい担当の職員の方々を含めて、今後の「招へい事業」に求められることなどを話合った。また、サネー国際部部長、NYB職員（同窓会役員を含め）と懇談を行った。懇談は、約2時間行われ、特に日本側から、招へい青年に対する選考方法についての質問をし、タイ側からのプログラムについての要望がだされた。

② ホームステイでは各自、事前に得た知識を、実際に体験してみる事となった。それぞれ

カルチャーショックが多少あったようだが、各家庭で暖かくお世話してもらい大変良い経験をしたようである。

- ③ 大学の視察では、チェンマイとバンコクでそれぞれ行ったが、地方都市と首都での学内の雰囲気の違いがあり、バンコクのチュラローン大学では、概要説明、施設見学後、クラブ活動の見学を行った。特に我々が見ることのできたクラブは、山岳民族を対象に、子供達への学習指導等のボランティア活動を行っており、日本にはない、少数民族との交流を行うクラブを写真や学生から話を聞くことによって、知ることができた。チェンマイ大学は、タイ国内最大の総合大学であったが、地域と密接に関わり、特に北部での人材育成に力をいれており、タイの大学のもう一つの顔をみることができた。残念なことは両校とも試験期間中であり、チュラローン大学のクラブ活動の視察以外に大学生との懇談、交流を行えなかったことである。しかし、両校の受入担当の方の我々に対する施設見学や概要説明などがとても丁寧であり、気持ちの良い視察となった。

帰国青年との交流としては、今回の訪タイでは、92年学生グループの参加者には10名、90年青年指導者グループには3名、そしてその他の帰国青年の中核になって活動している方々に合うことができた。このことは「再交流」としては成功したと思われる。今回タイを訪れたメンバーが、新たに来日するタイ青年のお世話を中心になって行うこと、そしてまた新たにタイを訪れるグループを作り、再会することを誓ってタイをあとにした。

このように外国から企業を入れ、経済発展をめざしているようだが、バンコク市内を見るとその歪みははっきりと出てきている。例えば、公害についてであるが、2年前にも友愛から調査団を派遣させて頂いた時と何ら変わりなく、古いバスや車、バイクもたくさん走り、それから出される排気ガスは物凄い。一日バンコク市内を歩いていると喉や目が痛くなるし、顔は黒くなる。これを法律で規制すると走れない車が増え、また、車しか交通手段のないバンコク市内では交通機関が麻痺してしまう、これを解消するためには、政府が何らかの政策を取らねば解消できないが、それには莫大なコストがかかり、政府も手の施しようのないところである。(文責：小林)

次に、タイを知るための調査については、新潟県の飯高さんにまとめて頂いたので、それを掲載する。

タイを訪問する前に私が持っていたこの国の印象は「微笑み国」の言葉に代表されるような人の気持ちもゆるやかで、全体にやすらかさが感じられる国、というものであった。実際、10日間の行程で、そのイメージは正しかったと随所で認識できた。2月は初夏にあたり、暑さはそれほど苦にならない。温暖で快適な気候の中、ホームステイした家庭の皆さんをはじめ現地でお世話下さった方々、視察先で温かく迎えてくれた人たちの親切心が、私達の滞在を一層心地良くしてくれたと思う。

毎年、派遣されるこの調査チームの定版の訪問先として日本大使館とNYBがあり、プログ

ラムとしては、帰国青年達との懇談会があり、ホームステイもそうである。これらのスケジュールに自主研修日（フリータイム）と移動日を加えると、大体半分の日程が消化される。残された半分のスケジュールをどう組むかで、調査の特色も変わってくると言えるだろう。私達の場合は、大学を2ヶ所視察したが、それぞれの特色の比較ができて良かった。バンコクのチュラロンコーン大学は同窓会のスラボン会長と現地の通訳スイモン先生の勤務先であった。スラボン会長は同行して案内してくれたが、タイという国を紹介した普段観ることのできないマルチスライドを公開してくれるなど、特別サービスがうれしかった。また、チェンマイ大学は広大なキャンパスにびっくりし、環境の素晴らしさに脱帽した。団員の一人に地方大学の学生がいたので、視察先にチェンマイ大学を選んだわけだが、どちらの大学も見応えがあった。タイ国内には、タマサート大学という大きな大学がもう一つあるそうである。これら3つの大学の卒業式には国王も出席するそうで、そのステータスは相当なものらしい。大学以外の教育機関として、タマサート大学の付属小学校も視察したが、ここの教育熱心さにも驚いた。会った人間にいろいろ聞いてみると、国全体が教育に対しては、特に一生懸命に取り組んでいるという印象を受けた。その他、全国紙を発刊する新聞社を視察したが、これは団員の中にローカル紙（今は廃刊）のカメラマンがいたためである。

さて、肝心の帰国青年の動向、及び同窓会の活動状況、さらにNYBとの関係などであるが、ここでは要点だけをまとめておきたい、まず、JICAの招へい事業が10年目を迎える今年を前にして、昨年2月、ようやくタイ国内で同窓会の組織が認知された。毎年、その調査チームが行っても感じてくることであろうが、現在、タイでは青年活動はじめ様々な社会運動が実施困難な状況にある。政治情勢や社会制度が不整脈をきたすことによるものだが、残念ながらぎりである。招へい事業対象のアセアン諸国の中でも、同窓会の設立認可がもっとも遅かったようだ。したがって、活動状況もそう活発でない。役員との懇談会の席上では、資料やスライドで年間活動報告をさかんに説いていたが、実態は異なると判断できた。この同窓会が認められたのが昨年2月20日であるから、私達は、会組織としては初めて接する調査チームだったわけである。招へい事業で来日した青年は今年で1,500人にのぼるが、同窓会への加入率は、その10%、つまり150人にすぎないという。また、NYBとの関係であるが、一言で言えばNYBの実質的な権限下にあるのではないか。あとで詳しく触れたいが、招へい事業の実施がこの国では全てNYBのフィルターを通されるのが現実であった。

しかしながら、出会った同窓会のメンバーは明るく、陽気で、とりわけ役員の間は張り切っているせいか、大変ナイスな連中だった。家庭環境や社会的身分、職業がらにもよるだろうが、たぶん彼等は「選良」なのかもしれないと感じた。

蛇足ながら、どこへ行っても話題にされたのが、皇太子殿下と小和田雅子さんのご婚約のニュースであった。特に雅子さんが美しく、知性的なスーパーレディとの評判は、タイにもよく伝わっていた。JICAのタイ事務所の阿部所長の話によれば、「昨年秋には秋篠宮殿下御夫妻

も訪タイされたなど、両国間の皇室関係は密接である」とのことである。(文責：飯高)

### 3. 現地活動報告

#### 3-1 表敬・訪問先における意見交換内容

##### ・ JICAタイ事務所

タイ事務所は、阿部所長を含め14名の日本人スタッフ、タイ人職員が10名前後、および通訳や運転手などの一時採用者が10名程度で35名程の規模で運営されている。所在地は、日本大使館の東側に隣接しており、3階建ての綺麗な建物であった。

阿部所長との懇談では、まず最初に、宮沢首相のASEAN歴訪時に青年招へい事業を新たに5年延長する事がきまったという話を聞いた後、業務やタイ国情等についての説明を受けた。

主な業務としては、①技術開発や研究調査および資金協力、②協力隊隊員の配置およびそのフォロー、③研究員(技術者や行政官等)の日本受入や技術研修、および④青年招へい計画の実施など、タイにおける海外協力の最前線基地として、その業務は多岐にわたっている。特に団員は実施協力で本部や地方にて、プランニングや実施、運営に携わっているのもやはり、「21世紀のための友情計画」の招へい青年、プログラムについて説明を多くして頂いた。その他にも、タイの国情についての説明を受け、また、JICAタイ事務所、NYB、同窓会との関係についても話を聞くことによって、このアフターケアチームの運営について、より体系的に把握することができた。

タイという国の概要説明では、阿部所長から政治情勢、対日感情、福祉制度、進学率の話聞くことができた。政治情勢については、92年5月のクーデターについて聞かせて頂き、50名が死亡500名が行方不明となっており、その行方不明者の消息はいまだ闇の中のままである。福祉制度は、公的なものは、まだまだ発展段階にあるようで、91年に社会福祉法ができ、30名以上の企業体は、従業員を社会保険に加入させるようになった。しかし、基本的には大家族、敬老の精神が残っており、相互扶助の精神でやっている。お寺にも寺子屋の名残の様なものがあり、事前事業を展開している。大学の進学率については、大学などの口頭教育への進学率は7.07%であるが、大学の数は増えている。70%の人が奨学金をもらい通学している。オープンユニバーシティ(通信教育大学)の学生が37万人いる。コース毎に学費を払うシステムで、8年で学士免状がとれる。第7次社会経済開発計画(1991年から5ヶ年計画)修了までには、現在小学校までの義務教育を中学までにしたいというのが政府の方針である。

また、団員全員が初めての訪タイということで、生活面(水、食べ物等の衛生面、交通事情等)の助言を頂き、その後、日程、車、通訳等の手配状況について説明を受けた。ま

た、この日に予定していた日本大使館表敬は担当事務官の急用により延期となった。

・首相府青年局（NYB）

当日は忙しい会議の間をぬってウライワン次長が出席し、労いの言葉とともに、今後も青年招へい事業に期待をしている旨の話があり、私たちも今回の訪タイを含め、協力して招へい事業の充実を図りたいという挨拶を行った。まず最初にNYBの諸活動についてのスライドを見て、サネー国際部部長以下7名の青年招へい事業の事務担当者の方々と懇談を行った。

特にタイ招へい青年の選考についての質問をした。毎年150名が選考され、派遣される。選考方法は、NYBの選考委員会内に6つの分野グループごとに小委員会が置かれ、それぞれが、各グループの関連団体に推薦を依頼し、そこから推薦された人の中から、最終選考をする。また全国77県にも推薦依頼をし、各県に参加候補登録者がいて、その名簿に登録されてから、2、3年以内には派遣されるようになっており、参加者の出身地が全国均等になるように配慮している。

・同窓会役員との懇談会

同窓会役員との懇談会は、最初8日の午前中と昼食だけで行う予定だった。しかし、昼食をともにし、ざくばらんに懇談することができ、全員が時間が足りないと思うほど盛り上がったので、もう一度話がしたいということになり、午後、同窓会役員の全員は学校や仕事があったので、この日夜、再会し、夕食をともにしながら懇談を続けた。

懇談会の席上で出された主な意見を挙げてみると、①来日青年が受ける日本での共通プログラムに、日本語講座の時間数が足りない。②日本青年だけでなく、いろいろな国の青年たちと交流したい - 来日したときに、他国のグループと交流する場をもっと設けてほしい。③以前帰国青年に対し、雑誌「パシフィック・フレンド」がよく送られてきたが、ある時期から止まってしまった。④アフターケア調査チームの人数が少ない。相互交流を図るためには、もっと多くの日本青年がタイに訪れてほしい。以上が同窓会側から要望がだされた。

この懇談会は午前10時過ぎからはじまり、2時間の予定だったが、前半は自己紹介や同窓会を紹介するレクチャーやスライドを観ることに費やされ、交通事情が悪いため、11時半には昼食会場へ向かわねばならず、招へい事業に関する意見交換の時間は実質30分程度しかなかった。お互いがじっくり話し合う場面はこのときしかないと思うので、半日くらい必要であろう。ただ、この後の昼食会に加えて、同窓会側の提案により、夕食も彼等の招待を受けて懇談ができた。

同窓会のスラポン会長は夕食会で、①同窓会は、前述したようにNYBの半ば管理下であり、情報が不足している。他国の同窓会の情報もよくわからない - これを一番気にしていた。②同窓会の役員をボランティアでやっているが、与えられた仕事をこなしてい



るだけで意欲を持ってやっているとは言えない。③その結果、何をしたらよいのかとまどっている — など語り、招へい事業に関してはもちろん、日本の青年団体の活動までを含めて、情報をリリースしてほしいと話した。

また、ある役員の一は、初年度の招へいで来日したが、ホストファミリーが引っ越したため連絡が取れず、久しぶりに便りを出したくても住所がわからず困っていた。私たちは、招へい事業におけるアフターケアをどう施したらよいかを調べるために派遣されたわけだが、この程度の情報すら入手困難な現地の状況にやや愕然とした。

### 3-2 帰国青年同窓会の活動状況

#### ・帰国青年との懇談会にて

同窓会の懇談には、帰国青年7名が集まった。まず最初に報告したいことは、タイでもやっと同窓会組織ができ、92年の2月から国の認可を受け、様々な活動を展開している。

同窓会役員との懇談では、その活動についての質問をした。同窓会は92年2月に政府から認可されてから、まだ1年しか経っておらず、これから活動を充実させていきたいということである。現在帰国青年総数1,500名のうち、150名が会員(年間50パーツの会費を収めた人)になっている。主な活動内容は、国内では身体障害者の施設でのボランティア、現地プログラムでの来日前の青年とのディスカッション。国外では、アセアン同窓会連絡協議会への参加、ユース・フォーラム・キャンプへの参加である。このような同窓会組織としての活動状況を聞いた後、今後の展望や取り組み、また要望についても話し合った。今後については、このアフターケアチームの受入に力を入れていきたいということで、できれば、日本からもホストファミリーや合宿セミナー参加者にもたくさん訪問してもらい、再交流を行ってみたい、また、招へい事業のように1ヶ月間、あらゆる分野の青年を大人数で受入れたいということであった。

役員は現在、会長以下17名で、任期は2年である。事務局はNYBの建物の一室にあり、会議もNYBの会議室を借りて行われているようである。

一方、同窓会の一般会員、あるいは同窓会に加入していない帰国青年の動向であるが、同窓会が産声をあげるまでに年月がかかり、生まれて間もないため、ほとんど把握されていないのが実情だ。活動の普及には努めているが、未加入の青年を勧誘するまでには手がまわらないといったところか。送別会やチェンマイへ行ったときなど、昨年の来日青年たちが顔を見せてくれたが、90年の青年指導者グループのメンバーには3人しか会えなかった。もっとも、このうち2人はNYBに勤務する職員であり、再会は当然と言えば当然であった。あと一人は、来日時のホストファミリーからプレゼントを預っており、こちらから電話連絡をした上での再会であった。NYBに勤務する職員の一は、フリーの夜に団員の二人を家族と一緒に夕食に誘ってくれた。二年半ぶりであったが、なつかしく、こ

の好意には非常に嬉しく思った。帰国後の礼状に、感謝の気持ちを改めて綴った。

やはり、便りの交換や連絡が定期的に行われないうち、ホストファミリーですら親交を続けるのは容易でないと思う。プログラムコーディネーターやスタッフでは役不足かもしれないが、「古い友人」に多く会えないのは残念であった。私達の訪タイの件は同窓会でも会員に周知されておらず、会員以外の青年とコンタクトを取るには、個人ルートしかなかった。今回、ホームステイを引き受けた帰国青年ですら、同窓会の会員でなかったことを考えれば無理もないだろう。

話はそれるが、同窓会メンバーは平日ということもあって、仕事や学校の合間を縫ってこの懇談会に参加しており、懇談会が終ると、それぞれの職場や学校に戻って、再び夜の交流に参加してくれた。また、我々5人が助けを必要としている時には、必ず我々に同行してくれた。彼らはこのような受入で人と接することが好きであることは勿論、それ以上に日本における「招へい事業」の成功を感じるとともに、日本の国、人を少しでも理解しようとしてくれているのを感じることができた。

### 3-3 セミナー・交流会実施状況

セミナー形式のプログラムは、特に設定しなかったため、以下には交流会についての報告を記載する。

#### ・帰国青年との懇談会にて（特に送別会について）

滞在の最後の夜に、NYBと同窓会、JICAタイ事務所の共催で送別会が開かれた。出席者は、タイ事務所より三輪さん、帰国青年、ホストファミリーほか関係者24名で、ホテルサンルート2Fで行われた。特に堅苦しい挨拶もなく、定席でテーブル5つに、我々5名とホストファミリー、残りの席に同窓会、NYB幹部というような形で座った。アルコールのないソフトドリンクのパーティーで、バイキング料理の夕食を食べたあと、スピーチや歌を聞くという少し変わったスタイルの進行であった。メインコーナーは我々を受け入れて下さったホストファミリーからの、ホームステイの報告であろう。その中で食べ物や生活様式の違いに苦労している私達の様子が披露されたり、ホストファミリーが私達を楽しくもてなすために考えた工夫など、エピソード混じりの愉快なはなしに一同大いに笑った。JICAの元職員や元コーディネーターで私達と面識があり、現在、タイに住んでいるという3人も駆け付けてくれた。こうした人たちが同席すると、日本で受け入れた際のシーンがよみがえったような気分になる。だが、今回はゲストとホストの立場は逆になっている。かれらの真剣にパーティーをアレンジする姿や、心を込めた歓待に、ひたすら感謝をしたい。エンディングはタイダンスを全員で踊り、盛会の内に幕を閉じた。

### 3-4 ホームステイ実施状況

ホームステイはNYBがセットして下さった。当初、1泊2日の予定であったが、2泊3日となった。ステイ先については、菅野さんだけは、91年アセアン混成グループで来日したスリポンさん宅だったが、他の4名は92年勤労青年、青年指導者グループで来日した青年宅にそれぞれ2泊づつしてタイ人の生活に触れることとなった。ただし、残念だったのは、永見さんと小畑さんが同じ青年に世話になったことである。

○ 飯 高 潤

Mr. Chansak LANUSATTAYA 30歳(両親、弟2人、妹、伯母、姪)

2/4 Soi 3, Phahonyothin 52, Klongtanon, Bangkok, Bangkok 10220

TEL. 552-4886

○ 小 林 洋 介

Mr. Somkiat YEEMUDA 30歳(妻)

75/1 Pharam 6 Road, Rachatevee, Bangkok 10400

TEL. 246-0042

○ 永 見 恵 子 / 小 畑 理 恵

Mr. Sonthaya PHOLCHAROEN

314/160 Ramkamhabng RD, Huamak, Bangkok, Bangkok

○ 菅 野 直 子

Ms. Somsri SONGCHAN 29歳(夫、娘1人)

Ramintha Road, Klongkoom Bungkoom, Bangkok 10230

TEL. 519-3420

### 3-5 その他

以上述べてきた以外に、マティチョン新聞社の見学を行った。マティチョン新聞社では、サム・ボンチャント相談役が対応してくれた。まず、会社の経歴や現状等の概要説明のあと編集部、製作部、資料部、印刷工場等の見学を行った。マティチョン新聞(32ページでのブランケット版、4色刷り)はタイ語の高級紙で政治経済関係の記事が中心である。特にビジネスマンや大学生ら知識層に親しまれている。16年前に創刊され業界では3位のシェアを誇る。

マティチョン本紙のほか、政経、文化、スポーツなどを盛り込んだ一般向けの総合紙「カウソ」、雑誌では週に2回、ビジネスマン向けに「バチャーチャー」とハイテク等の農業技術をわかりやすく紹介した「テクノロジーチャードーン」を発行。月刊誌としては文化や歴史、話題ものなどを掲載した「アート」を出している。特に経済誌のバチャーチャーはタイの経済発展とともに伸びているという。

マティション新聞についてもクーデター後に倍増したという。クーデター当時の政府は報道統制を行っており、クーデター発生時には政府がテレビ局を封鎖し、国民は正確に得にくい状況におかれた。同社の新聞について通訳のスイモン先生は「私もクーデターの様子は見ていたが、同社の新聞は事実を正確に報道していた。」また、「クーデター後の購読者数の増加は、以上述べた理由からだ」と話していた。

#### 4. 青年招へい事業に対する相手国側の評価

招へい事業に参加した青年に聞いて見ると、日本に行ったことによって、日本を理解するだけでなく、帰国語も青少年活動に積極性が出てきたことや、日本についての情報などにアンテナを高くするよう心掛けている、というようなことを聞くことができた。また招へいした青年が、タイにおいては、終始にこやかでとても明るく、イメージが変わってしまった人もいた。その後も、日本の青年やホストファミリーと、手紙のやり取りをしている人もおり、総体的には、評価は至って高く、国際交流としては満足のいくものになっているようである。

帰国青年との懇談会では、参加者に一人ずつ、招へい事業への今後の期待を聞いてみた。文化財などの見学や交流プログラムについては、現在のボリュームで良いとのことであるが、全体的にはもう少しスケジュールに余裕を持たせて欲しいという意見とともに、研修的なプログラムとして、青少年活動の現場への参加、企業などのマネジメントや品質管理、マーケティングについての研修なども行っても良いのではないかとすることも希望として挙げていた。また、プログラム外の例えば、夜や自主研修の時間を増やし、個々に日本の青年と交流できる時間が必要と感じているようであった。それは、グループ全体で行動するプログラムではできない、個々の調査研究や本音で聞いてみたいことなどを話すことができる、という意見であった。しかし、調査団5名では、判断つかないものであり、聞くことだけに留めた。

#### 6. 調査チーム参加者の感想

##### ○ 飯 高 潤

エキサイティングな都会 — バンコク。地方都市の自治体に勤務する関係で、日本国内をはじめ、私は海外の諸都市を見て回るのが好きだ。アジアの都市は初めてだったが、バンコクは東京、シンガポールと並び東アジア屈指の大都会であるため、期待に胸を踊らせた。都市の魅力という観点で見れば、ここは「快樂」を提供する街かな……が第一印象であった。マスコミや風評で伝え聞く麻薬とセックスがあふれる繁華街、湿潤な気候と多種のフルーツに代表される食べ物のおいしさ、開発が進むリゾートの美しさ等、人を魅力する要素は多い。2年前、米国南部の都市を視察したが、ダラスやヒューストンは知性的な快適さを人に与える街であった。これに対し、バンコクは遊性的な雰囲気や街全体にただよわせ、人が楽しむ

ことを飽きさせない都市なのかも知れない。市内中心部はいつもにぎやかで、東京の新宿のようだ。通りを少し走れば、どこの雑踏も下町商店街を連想させる市場や露天が立ち並ぶ。きちんとせず、喧騒が交錯するアンバランスも、十分に都市の魅力である。ただ、一つ注文したいのは、交通ラッシュの解消である。都市開発の面で道路整備などの交通対策は重要である。排ガスによる大気汚染の問題もあり、早急に取り組むべきだろう。

ホームステイは楽しかった。私自身が初めての体験であり、ホストファミリーの経験は何回かあったものの、やはり少々不安であった。王宮付近の寺院や国立博物館、ローズガーデンなどに連れていってもらったが、圧巻はチャオプラー川のディナー・クルーズであった。中流付近のレストランの棧橋から河口まで往復するのだが、この夜景が大変美しい。ぜひともお勧めする。ホームステイにはいろいろな楽しみ方があるはずだが、行楽ばかりでなく、ステイ先の近所なども見せてほしかった。ホスト役の青年（92年青年指導者グループ）もホストファミリー初体験で気負いが感じられたが、何度も“Never Mind”と言いながら、一生懸命に案内してくれた。最後の夜は親戚や友人など15人も集まって、夕食を共にできたのも嬉しかった。

以下、現地で思ったこと、考えさせられたことなど断片的ながら書くことにする。出会った人と話す中で、よく感じたのは、日本に対して敬愛の念を抱いている人が多いことである。視察したタマサート大学付属小学校では、全学年のクラスで毎日、日本語の単語を一つずつ教えている。また、チュラロコーン大学は理工系の研究実施でタイ国内でも有名なのだが、ここのある講師は、日本のハイテク技術はどの分野も優れているとときりに感心していた。ホームステイ家庭の隣に住み、見学にずっと同行してくれたおばさんは、何度も日本に来たことがあり、日本は大好きだと言っていた。彼女は日本人の親切さと四季の美しさに富んだ山々が素晴らしい、と話してくれた。国際的地位の高い大国に発展し、生活もきわめて豊かな日本は、アジアで成功した立派な国と、畏敬の目で見られているのかと感じた。

海外へ出ると、「日本を逆に省みることができおもしろい」とよく本などに書いてある。その通りかなと思う。日本人の食生活がいかに豊になったとはいえ、タイ人の食文化もなかなかだと感じた。食材の数は豊富だし、食後のデザートやお菓子のバラエティさには驚いた。アクセサリーやハンディクラフト品のデザインは繊細でカラフルなものが多かったし、大きな公園や大学の建物などの景観は欧米並みに洗練されていた。私たち日本人は、デザインや環境を重視するイタリア人のように本当に生活の質の面でも豊になったかと問えば、疑問が残る。この意味では、地方はいざ知らず、バンコクに住むタイの方が日本人より豊かさの「享受度数」は高いのではないかと、首をかしげてしまった。

#### ○ 小林 洋 介

「暑い！」これがタイのドンムアン空港に降り立った私の最初の言葉でした。東京を出るときには10度。タイに着いたらいきなり30度で、20度の気温差はしばらく私の頭を「ボ

ーッ」とさせた。空港からホテルに向かう途中の車の中から車外を見ると、多くの日本車が左側通行で走っていく。あこがれのタイは「日本の夏と変わらない」という第一印象を受けた。また、「大好きな青年達の住む国へ来たんだ」という喜びと期待、その反面、「プログラムに対しての情報が少ない」という不安もあり、暑さと、喜び、期待、不安が入り乱れて、とても複雑な気持ちで、この10日間で気の遠くなる程、長くなりそうな気がした。

さて、この長くなりそうな、実際には短かった10日間のプログラムで一番印象に残ったのはホームステイであった。

私のホストファミリーはソムキアットさんでした。彼は昨年夏に招へい青年（勤労青年グループ）として来日しており、日本に対しての知識や日本人の気持ちの分かる方だったので、私も彼と打ち解けるのに時間は掛からなかった。彼の家はタイの一般的な家庭で11人家族、殆どの家族は別々に暮らしているらしいが、お父さん、奥さん、お兄さん、妹の5人で住んでおり、家族で私を温かく迎えてくれた。彼の家は本当に庶民的な家庭で、車もなければバイクもない状態で、その分、私もいろいろな経験ができた。例えば、市内に出るまでに、まず自転車（二人乗り）でバス停までいき、そこからバス（ノンエアコンディショナー）、次に見学場所によってはトゥクトゥク、徒歩によって移動した。ご存じの通りバンコクには地下鉄がないので、選択の余地もなく全て移動は車関係になった。これが私にとって、楽しくてしょうがなかった。見学地で見学する時間よりも移動している時間の方が多かっただろう。今でこそ近代都市と呼ばれているバンコクも、バスに乗って移動すると近代都市らしからむ顔を度々覗かせてくれた。それは厳しい現実であるとともに、実は都市がもつ当然の顔であるのかもしれない。無機質なビルを仰ぎ見た後に目に飛び込んでくる庶民的な光景……道端で遊ぶ子どもであったり、店をひろげて物を売っていたり…は、貧しさの象徴である、という人もいるかもしれない。しかし、それはどこの都市も持つもうひとつの顔であり、そこに住んでいる人の本当の生活空間なのであり、人が住んでいる都市の証なのである。

話がそれたが、例えば地下鉄で移動をしていたら、このような都市の証を見る機会がなかったであろう。それはちょっとした旅であった。昼はこのちょっとした旅を楽しみ、夜には家族との交流が始まった。

しかし、ステイ先に返ってきた私はベットに入りたくてしょうがない。なぜなら、疲れていることもあったが、やはり彼らの生活習慣（文化）を体験することや家族と親睦を深めることを恐れ、不安でしょうがなかったからである。私が床に入るまで三つの関門があった。それは、食事、風呂、（シャワー）、家族との団欒である。まず、食事だが、確かに食べてみると美味しいのだが、口に入れるとなんともいえない匂いが広がる。風呂もお湯の蛇口を捻っても水しかでてこない。タイは夏といっても、今まで冬という季節にいた私にはいささか抵抗感がある。勇気をだして浴びるとやはり冷たい。そして家族との団欒、最初の夜はお互い遠慮しがちに話を進める。また、家族の全員、英語が殆ど全滅。これだけ見れば私（一人

の日本人)には苦痛としか言い様がない。もう逃げ出したいくて逃げ出したいくて、時にはホームシック気味の感もあった。これだけ見れば最悪のホームステイプログラムと思われるかもしれない。

しかし、私が冒頭で述べた通り、ホームステイプログラムは今回の訪タイで忘れ難いよき思い出となっている。なぜなら、私のホストファミリーは「心から君を歓迎します」という気持ちがあった。文化も生活習慣も言葉も違う、確かにその生活に馴染み、交流することは時間がかかるものだし気も使う。しかし、それは心があれば乗り越えられる。不安になっている私を家族の一員、子供として、兄弟として(ちょっとお客様扱いな部分もあったが)扱ってくれる。それがとても嬉しかった。その家族の中には、必ず相手を思いやる気持ちがある。たとえ生活習慣が違ってもこの気持ちがあれば交流できる。お互いの国の言葉を教えあったり、家族を紹介しあったり、とても安心した気持ちになる。私はタイに来て以来暑くなったり、寒くなったりで崩していた体調もお蔭でよくなり、いかにその土地の人間や環境に馴染むことが大事であり、それはお互いの気持ちしだい、それ以上にこちらの出方、考え方しだい決まる様な気がした。

また今回のアフターケアチームで、一番良かった体験は、ホームステイや表敬訪問、見学旅行等、実際に参加者の一人となってみて、初めて招へい青年の気持ちがよく理解できた。これはお金では買えない貴重な体験であった。

10日間という短い日程ではあったが、忘れない事業の一つである。このようなチャンスを与えてくれたJICAは勿論のこと、10日間、限られた時間の中でお世話頂いたJICAタイ事務所、NYB、同窓会、そして、ホストファミリーのソムキアットさん、その他、お世話頂いた皆さんに感謝を述べたいと思います。

#### ○ 菅野直子「ホームステイの印象」

私のホストファミリーは、ソムシー・ソンチェムさんご一家でした。彼女は1992年5月、私がプログラムコーディネーターとしてお世話したアセアン混成教員グループのメンバーだった方です。

タイ滞在中にぜひ会いたいと思っていた彼女が、私のホストファミリーだと聞いたときは本当に嬉しく思いました。日本で直接お世話した方と再会できるというのは、とても感動的なことでした。

彼女は日本での滞在に対して本当に良い印象を持ちつづけてくれており、私を心から歓迎してくれました。ご主人と7歳の娘さんの3人家族なのですが、2泊3日のホームステイ期間中10人以上もの親戚が私に会いに来てくれ、東北地方に住むご両親にまで、電話で片言のタイ語でご挨拶させてくれました。

彼女との再交流を通して一番印象に残ったのは、“ワーイ”についてです。“ワーイ”とは手をあわせてお辞儀をするタイの丁寧な挨拶のことです。彼女とその家族と行動を共にする

間、タイ人にとって“ワーイ”はとても大切なことであると感じました。これは、タイ人の信仰心の深さとも関係しているのではないかと思います。

まず驚いたのは、家へ向かう途中何度かお寺の前を通りかかった時、彼女が車の中からお寺に向かって手を合わせたことです。またその時、私にも“ワーイ”をするように勧めるのです。タイの街角のいたるところにある祭壇に向かっても同様でした。そして私が同じように“ワーイ”をしてみると、彼女はとても満足した様子でした。

ホームステイ期間中は家族はもちろんのこと近所の人やお友達等、数多くの人と出会いました。なかには、慣れない外国のお客に対して緊張感をもった様子の方もいましたが、私が“ワーイ”をして、タイ語で挨拶すると、半ば驚きつつも、嬉しそうなホッとした表情で、“ワーイ”を返してくれました。これは、日本人が外国のお客さんに丁寧にお辞儀してもらった時とおなじような感覚なのかもしれません。

また、感動したのは、子供にお土産をあげたとき、必ず“ワーイ”をしてから受け取ったことです。日本でタイ青年が修了証を受け取る時“ワーイ”をするのを、印象深く見ていましたが、ここまで生活に密着した習慣であることを実感できたのは、大変印象深いことでした。

私を心から暖かく迎えてくれたソムシーに感謝しつつ、今後は、彼女の教えてくれた“ワーイ”で、タイ青年を迎えたいと思います。

#### ○ 永見恵子「タイの青年」

排気ガスの混じった熱風と騒音。バンコク国際空港に降り立ち、真っ先に驚いたことだったバンコクの大気汚染のことは事前に知らされていたものの、実際に体験し、その空気の汚さにショックさえ受けた。

この国はGNPの伸びを高い水準(1992年から1996年までの国の第7次計画では、GNPの平均伸び率は8%を目標にしている)に設定し、計画に従い飛躍的な経済成長を遂げている。外国資本の導入による工場の建設、中心街の建設ラッシュ…など、まさに躍進している国なのだ。大気汚染や河川の流れは、この国のエネルギーの代謝の代価なのだ。日本は成熟期に入り「成長よりは環境」「開発よりは自然保護」を望む声がようやく高まってきたが、タイの人々は経済優先の結果、公害を発生させてしまった日本と同じ道を進むことを望んでいるのだろうか。経済発展と環境保護、またこの両方のバランスをこれからどのように考え、進めていくのだろうか。幸にしてホームステイでは、これからのタイを支えていく青年たちにたくさん会うことができた。私のホストファミリーは23歳の青年の家で、彼は日系自動車会社に勤務する技術者だ。ホームステイ受け入れを申し入れたのは、彼の無二の親友で、昨年、21世紀友情計画に参加した青年だった。二人は工業専門学校時代からの親友で、2泊3日間のホームステイでは、彼等のとても中の良い友人達が、街を案内してくれた。おかげで深夜のディスコやバンコクの生の生活を体験することができた。特にボートは大気



汚染より凄まじいものだった。川を下るといふ優雅なイメージを思い浮かべ提案したのだが、実際は全く正反対のものだった。川は黄土色に濁り悪臭を放つ。そんな中を水しぶきをあげながら走る。バンコクの人々は、このボートを通勤に使っているようだ。考えれば、悪臭さえ我慢すれば、交通渋滞の道路よりは快適なのかもしれない。ボートは木とトタンでできたバラック小屋の間を抜ける。浄化センターの内部のような匂いの他に、そこで暮らす人々の食べ物の匂い、レストランに差しかければ肉の焼けた匂いや香辛料の匂いが漂ってくる。竿にかけられた洗濯物を眺めると市街地からは想像もつかない貧しさ、そして貧富の差を実感した。

1日目の夜は、友人ら6人と一緒にディスコに行った。出発前に突然起きた車のトラブルを直し、ホームステイ先を出発したのが夜の10時過ぎ。一路、夜の市内に繰り出した。町中のドライブの後、ワットポー（巨大な金色の寝釈迦像がある）近くで、この日5度目の食事。消化しきらない胃袋をよそに私もついつい料理を口に運んでしまった。しかし、彼等の食欲には感心させられた。ディスコでは人気バンドが熱狂的な演奏を繰り広げていた。ホールではミラーボールが回り、若者はボーカルに合わせ歌い踊る。ホールは若者の熱気で溢れていた。その熱気につられ、最初、ためらっていた私もついに一緒に踊る気になった。しばらく踊っているとここがタイで、彼等がタイ人であることを忘れてしまう。顔つきから人種の違いをそれ程、感じさせないせいもあるが、遊びに興じる若者はどこの国も同じだ、と思った。

ディスコで遊ぶ若者の姿はどこも同じようには見えるが、この国の若者は、昨年起きた政変を積極的に望み、それを支えたのだ。一緒にディスコで踊った青年の中にもクーデターに参加した青年がいた。その青年の家を訪れた際に、民衆の手で撮影された生の映像（ビデオ）を見ることができた。そこには軍隊が放つ銃声の中、ひれ伏す人々、肉親が殺されなき叫ぶ女性、学校近くで威嚇射撃する軍隊。自分のシャツで手を縛られ逮捕される民衆の姿などが、写しだされていた。ごく普通のおとなしい青年らが、政府の行った不条理を許さず、勇気を持って立ち向かったことにととても感激した。タイには、工場排水の処理や排ガス規制、上下水道の整備交通網の整備、エイズ対策…産業の発展とともに改善していかなければならない問題が山積みしている。しかし、こういった若者に支えられている国だけにその将来に希望を抱くことができた。

#### ○ 小畑理恵

1992年、タイ青年の広島プログラムに参加したことがきっかけでこのアフターケア調査プログラムに参加させて頂きました。

タイの青年達と日本で交流し「タイ」という国に興味はあったものの、いざ自分自身がその国に行くということになると不安で始めはととても迷いました。その時、私にはまだ多くの人がそうであるように、タイは発展途上国、貧しい国というイメージしかなく、たとえ10

日間とはいえ、正直にいうと期待よりも心配なことばかりでした。しかし、実際に行ってみると不安が嘘のように暖かい人々に受け入れられ、たしかに豊かとは言えないながらも生き生きとしたタイの生活、人々が大好きになりました。

到着後、次の日にJICA事務所で今後のプログラム日程についての打合せがあり、その後日本大使館の表敬訪問がある予定でしたが、都合により中止となり、少し残念でした。

私にとって、一番「タイ」を感じる事ができたのが、その後2日間のホームステイです。これは予定では1泊ということでしたが2泊にのび、ハードではあったがとても有意義な2日間になりました。私は永見さんと2人で一つの家にはいることになっており、私達を受け入れて下さったのは、主に2日間行動をともにしたソントヤ君以外すべて女性という家庭でした。みんないつも笑顔を決やさず「ありがとう」と「おいしいです」位しか通じない私達をととても暖かく迎えて下さいました。2日間ほとんど出かけっぱなしで、家にいるのは寝る時くらいだったことや言葉が通じないこともあってソントヤ君以外の家族とはあまり話ができなかったけれど、初めてお会いした時に「自分の家だと思ってね」と言ってくださり、私達が居心地よく過ごせるようにして下さいいろいろな心使いには本当に感激しました。私達を2日間いろいろな所に連れていってくれたのは、ホンダに勤めるソントヤ君とその他6人の友達であり、彼等を通して私と同世代のタイの人たちの考えていることを知ることもできました。本当に皆親切で、また、エネルギーで私達日本人に今失われつつあるものを見る思いでした。

ただ1つ私をホームステイ中にホームシックにさせたのはシャワーでした。水道を捻ればいつでも温かいお湯が好きだけ出てくる生活が当たり前と思っていた私にとって冷たい水がわずかにでるだけのシャワーには、つい日本のお風呂と比べてしまわずにはいられませんでした。

この2日間は、私の人生にとって最も貴重で忘れられない体験となるでしょう。この2日間で私は日本でも、ホームステイ受入れに必要なのは、彼等が私達にしてくれたように、お客様ではなく家族の1員として受入れることだと思いました。

来日青年との再会も私にとって、彼等の本当の姿を見ることのできたよい機会でした。タイでの彼等は本当に生き生きとして見えました。

彼等と一緒に行動してみて一番印象に残ったことは、彼等はやはり上流階級の人で学生なのに携帯電話などをみんな持ち歩き、自分専用の車を乗りまわしている横で、貧しいたくさんの人々が道ばたで力なく、座りこんで物ごいをしていたりする風景とのギャップに、貧富の差の激しさを見た思いでショックでした。

私達は、他にいくつか大学、小学校を訪問したり、新聞社訪問と忙しいながらも有意義な10日間を過ごすことができました。そして、私にとって東南アジアの一つの国を知るとても貴重な経験でもありました。

私にこの素晴らしい機会を与えて下さった方々に10日間、一緒に過ごした他の4人のメンバーの方々に、そしてタイで出会ったすべての方々に感謝します。必ず再びタイに帰ります。

## 7. 提 言

### 1) アフターケアチームに関して

今回の派遣において、特に改善して頂きたいということを上げることは難しい。強いて提言を上げるとすれば、「事前の情報」についてである。これはプログラム作成の段階で、我々団体のニーズを出しながら、JICA本部からタイ事務所、そしてNYBや同窓会に流される。そして、プログラムが作成され、実施となる訳であるが、我々が要望を出した後、それに対する受答えの情報量があまりにも少なすぎる。今回に限って言えば、「蓋を開けてみなければわからない」状態で、また、参加者の5名全てが初めての訪タイということもあって、その不安は大きなものであった。結局、タイに入った翌日JICAタイ事務所と打合せを行い、最低限の情報を得ることができたが、日本大使館への表敬訪問延期（結果的に中止）、ホームステイが一泊増えるなど、参加者の心の動揺は隠し切れないものがあった。できれば、参加者の参加者の精神衛生上、変更は少ないほうが有難いし、変更があったとしても日本の中であれば、それを分析、効果予測、決断、実施と判断をつけることが可能であるが、初めて訪れる国の中では、余裕のない参加者にとって酷なことである。お国柄や距離感を考えると、事前の情報を充実することは難しいと思うが、ホームステイや表敬訪問の現地変更は避けたいところである。

もう1点あげるとすれば、訪問先への情報提供である。このことについては、特にNYBの担当したところに限ってだが、5名の日本人が訪問する情報はいつているようであったが、それがどのような目的、人間、訪問時間等の連絡がいつてなかったようである。当然訪問先でのタイムテーブルもその場で決めるという形で実施、「より効果的に実施するために」という考える間もなく、概要説明、見学、質疑という定版で実施されて、少し勿体無い感もあった。結局、以上あげた2点についてであるが、共通して言えることは、できるだけ早い、正確な情報が必要となってこよう。

今回の派遣において、友愛から調査団を出させて頂くのが2回目ということもあって、どうしても2年前の前回と比較してしまうのだが、プログラム上の帰国青年との懇談会や送別会に集まった帰国青年の参加者のほとんどがNYB職員であったり、その中に我々が現地で会ったり連絡をとった青年しか顔を出していない状況であったりしたということもなく、プログラム全体で、JICAタイ事務所、NYB、同窓会で担当分けされており、新しい交流を深めるという意味においては申し分のないプログラムであった。NYBもできるだけ、結成されて間もない同窓会に機会を与え、育てようという意志が感じ受けられた。同窓会のメンバーもそれに応え一生懸命我々のためにプログラムを遂行してくれる。ほんとうに有難い限りで、まだまだ経験不足なところもあったが、取り立てて問題になるようなことはなかつ

た。このままJICAタイ事務所もNYBも同窓会を育て続けて欲しい。

メインプログラムであるホームステイもNYBの職員だけに偏ることなく、一般公募からの招へい青年の家庭に入ることができた。またどの家庭でも我々を温かく受け入れてくれて感謝の念に絶えない。

少々残念であったのは、我々の訪タイが帰国青年に対し連絡がとれていないということであった。結果的には、我々がタイに入った夜、青年に電話連絡し、訪タイ期間中のどこかで会う約束をしてからという形で再会できたが、できれば各招へいグループにNYBの職員が団長、副団長で入っているの、訪タイする団体や個人名をそれに関わった職員には事前に連絡を入れて頂ければ、今後のこの事業に対し、新しい交流だけでなく、再交流という意味の広がりもできるのではなかろうか。

韓 国

平成5年2月10日～2月16日

社団法人 日本ユネスコ協会連盟



## 1 調査目的

### (1) 調査目的

今回の「21世紀のための友情計画」アフターケア調査チームは、1991年に韓国の教員グループの地方分野別プログラムで引き受けを行った山口県の三ユネスコ協会会員と(財)秋田県国際交流協会事務局次長、そして中央実施協力団体である(社)日本ユネスコ協会連盟国際交流部職員の五名により構成された。山口県の光ユネスコ協会・防府ユネスコ協会は距離的近さもあり、ユネスコ活動を通じた韓国の民間ユネスコ協会との交流プログラムに長年活発に取り組んできている。宇部ユネスコ協会は今回の訪問を契機として姉妹ユネスコ協会締結を具体的にすすめることとなった。

本調査の目的は1991年来日した韓国教員グループが、「21世紀のための友情計画」に参加しどのような経験と成果を積むことができたかを確認し、今後の同計画のより効果的な実施企画に反映されることを願って実施されたものである。

### (2) 調査内容

調査事項として、下記のプログラムが事前に計画された。

- 日本大使館においてアフターケア調査団の韓国滞在中のプログラム全般の確認
- 「コリアハウス」において韓国伝統芸術観賞
- 教育部訪問
- 体育青少年部訪問
- 独立記念館訪問
- 韓国ユネスコ協会関係者との交流
- 国立博物館・安重根記念館訪問
- 帰国青年との交流
- 慶福女子商業高校訪問
- 帰国青年宅他でのホームステイ

### (3) 調査団員

	氏 名	性別	(上段) 現住所 (下段) 所属先
チーム リーダー	五十嵐 章 彦	男	〒757 山口県厚狭郡山陽町埴生西側 宇部ユネスコ協会理事 宇部興産株式会社勤務

	氏名	性別	(上段) 現住所 (下段) 所属先
メンバー	小松正昭	男	〒010-14 秋田県秋田市御野場三丁目9-13 財団法人 秋田県国際交流協会事務局次長
メンバー	石神澄子	女	〒273-01 千葉県鎌ヶ谷市道野辺938-32 社団法人 日本ユネスコ協会連盟国際交流部長
メンバー	清水昌法	男	〒747 山口県防府市南松崎町3-6 防府ユネスコ協会青年部長 建設省中国地方建設局勤務
メンバー	赤瀬徳代	女	〒743 山口県光市光井8丁目11-11 光ユネスコ協会青年部長 栄和電業株式会社(ワープロイン・室積)勤務

## 2 調査結果

### (1) 調査日程

日順	日時	業務内容及び訪問先
1	2月10日(水) 13:15	成田出発 (OZ101便)
	15:40	ソウル金浦国際空港到着
	17:00	日本大使館表敬訪問、日程等打合せ
	18:30	ロイヤルホテル チェックイン
	19:20	韓国伝統芸術観賞「コリアハウス」
	21:30	ホテル到着
2	2月11日(木) 10:00	教育部訪問
	10:45	北岳山展望台へ
	11:30	体育青少年部訪問
	12:00	体育青少年部主催昼食会
	15:30	独立記念館到着、見学
	19:20	ホテル到着
3	2月12日(金) 11:00	韓国ユネスコ国内委員会訪問 韓国ユネスコ協会連盟・木浦ユネスコ協会・釜山ユネスコ協会との会合
	12:00	韓国ユネスコ国内委員会主催昼食会
	13:30	安重根記念館、国立博物館訪問
	17:00	帰国青年との意見交流会
	21:30	ホテル到着



日順	日 時	業務内容及び訪問先
4	2月13日(土) 10:00	慶福女子商業高校訪問
	12:00	ホテル到着
	14:00	各ホームステイ先へ移動
	~17:00	
5	2月14日(日) 終日	ホームステイ先のプログラム
6	2月15日(月) 11:00	ホテル集合
		後、自由行動
7	2月16日(火) 6:30	ロイヤルホテルをチェックアウト
	7:30	金浦空港到着
	9:55	金浦発
		成田到着11:55 (OZ102便)
	10:15	金浦発
		仙台到着12:15 (OZ152便)
	11:40	金浦発
		福岡到着12:45 (OZ132便)

(2) 主要面談者

イ. 日本大使館

小 川 郷太郎 行使

西 尾 典 眞 一等書記官

辛 承俊 広報文化院

ロ. 体育青少年部

宗 魯翊 副理事官(青少年協力官)

呉 鉉宰 青少年交流課課長

金 光男 青少年政策調整室青少年交流課

ハ. 韓国ユネスコ国内委員会

鄭 彩 事務総長

鄭 斗鎔 企画管理室長

韓 ミョンイル ユネスコクラブ担当

安 亨均 利川ユネスコ・ユース・センター

ニ. 韓国ユネスコ協会連盟

趙 哲華 副会長

李 海珠	釜山ユネスコ協会顧問
金 龍根	釜山ユネスコ協会会長
鄭 善植	木浦ユネスコ協会会長
李 寅行	木浦ユネスコ協会副会長
金 淳	木浦ユネスコ協会会員
金 馨振	木浦ユネスコ協会理事

ホ. 帰国青年

朴 東根	ソウル北工業高校教員
朴 眩雨	ボイン商業高校教員
李 誠人	スムヨジャ高校教員
崔 馨任	ヨンイルシャ高校教員

ヘ. 慶福女子商業高校

金 順宗	校長先生
	教頭先生
	日本語教員

(3) 調査結果概要

在大韓民国日本国大使館広報文化院において、プログラムの確認をおこなった後、これまでの韓国青年招聘事業に携わっていただいた教育部への御礼のための表敬訪問と来年度より担当官庁となる体育青少年部への表敬訪問を行った。独立記念館、安重根記念館、国立博物館の訪問では、韓国の歴史・文化の理解を深めることができた。本プログラムの中心であった「帰国青年と今後の交流のありかたについて」の会談では、日本訪問の際のプログラム全般について率直な意見が述べられ、教育現場を訪れることで韓国における教育に対して全般的な理解を深める上で役立った。帰国青年を中心に韓国ユネスコ国内委員会職員も含めた四家庭でのホームステイは本プログラム参加者が韓国の人々の生の生活に触れる機会となり、交流を深める上で意義の深い計画であった。

(4) 現地調査・活動内容結果

イ. 訪問先における本件事業に関する意見交換の内容

① 在大韓民国日本国大使館広報文化院

同大使館広報文化院を訪問し、小川郷太郎院長（公使）、および当プログラム担当の西尾典眞一等書記官に表敬、意見交換を行った。

日韓両国の過去の歴史から、韓国の人々の心の中に複雑な対日感情があり、何かのきっかけで日本人に対する不信感となって表面にでることがある。たとえば、プルトニウム輸送問題は韓国の主要マスコミで「日本が原子爆弾を製造している」といったように

間違った情報となって伝わっていることなどがその例。広報文化の担当としてその修正に努めている。「21世紀のための友情計画」のような心と心の交流の場を通してこのような対日感情を改善していくことは今日の日韓関係に是非とも必要である。韓国滞在中に見聞を広めると共に韓国の立場を理解し、交流の輪を広げてほしいとの激励、要望が述べられた。西尾書記官には本プログラムの計画・手配にはじまり、到着日からホームステイ先に分散するまでの間終始お世話になり、心から感謝したい。

## ② 教育部

教育部は本プログラムの韓国側担当官庁であったが、来年度から本プログラムの韓国側担当官庁が体育青少年部に代わるとのことである。教育部社会教育振興課権黄玉課長にはあらかじめアポイントがとられていたが、急用とのことで不在であった。本件の担当事務官に、本プログラムに対するこれまでの協力とお礼を述べお礼の贈り物を渡して退出した。

## ③ 体育青少年部

体育館青少年部は従来の教育部に代わって来年度より本プログラムの韓国側担当官庁となることである。

青少年協力官の宋局長、青少年交流課呉鉉宰課長他の方々とは面談した。体育青少年部が来年度からのプログラム担当部局が体育青少年部に変更することになったが、今までと同じ方針で進めたいとの希望が述べられた。韓国側も1993年度から日本と同様の事業を実施する予定であり、それによりアジアはもとより日本の青年にも韓国を理解していただきたいとの説明があった。最後に日韓双方の理解をすすめるためには若い人たちの交流が必要で、このプログラムをさらに充実し実のあるものにしたいとの意見が表明された。

五十嵐団長より、本プログラムが実効のあるものとなるためにはただ単に韓国青年を日本に招き日本を理解してもらうことに留まらず、彼等が帰国後職場、地域、家庭さらには自分を取り巻く環境のなかで国際理解と国際交流の活動を行うことが大切であるので是非とも帰国後の彼等の活動を支援していただきたい旨お願いした。

青少年交流課がホネプロジェクトの直接担当課であり呉鉉宰課長他8名の課員全員の紹介があった。

表敬訪問後体育青少年部の招待で昼食会が催された。

## ロ、帰国青年の同窓会などの活動状況

韓国ではまだ帰国青年の同窓会の組織作りはできていないとのことであった。しかし、期によってはグループ毎、地域毎に定期的とはいかないまでも連絡をとりあって会合を開いているとのことである。すでに約600名の青年が本プログラムに参加しているのであり、そこで得た経験と知識を他の人と意見交換するなかでより幅のある国際理解をすすめ

ることが大切であろう。今後の帰国青年の同窓会の組織化が望まれる。

#### ハ、現地でのセミナー、交流会の実施結果

2月12日（金）に昨年度の帰国青年、および体育青少年部の呉青少年交流課長他同課関係者を交え意見交換会を行った。引き続いて開催された夕食交歓会では、交流会で十分に意図するところを伝え得なかった本音の意見や、将来に向けての改善案などが積極的に話し合われた。

交流会および夕食交歓会で話し合われた主な点は次のように要約されよう。

「21世紀のための友情計画」全体を便宜的に次の三項目に分け、それぞれのプログラムに対して提起された韓国の参加青年の率直な意見並びに印象を記述し、そしてプログラム全体に対する意見を最後に記す。（表記は鍵括弧内が韓国青年の意見で、括弧内がアフターケアチームの意見とした）

##### ① 項目〈共通プログラムについて〉

－「プログラム全般の構成立ては日本の受け入れ側が、日本の見せたい部分を縮小したものと解釈された。そこに表れた日本人のいわゆる「見せたい」部分が意図したそのまま、訪問者である私たち韓国人に伝わるかどうかという視点でいえば、それは必ずしも伝わるものではないと思う。そこに韓国と日本との間のズレあるいは認識の違いが明白に出ていたと受けとめられた。共通プログラムについては、これまでに参加した人々の意見をも取り入れて、その内容を双方で協議して決めると良いと思う。」

－「講義については、その内容が余りにも広範囲にわたりすぎていたため、その内容が心に残るといよりは、聞く端から消えていくような印象であったため、結果的には何も残らなかった。」

－「大学教授などの先生が来講してその専門分野について講義したが、特別に水準の高い用語を使う内容であるために、専門分野の人でさえ難しく、余りにも高度すぎ聞き取れず、通訳がついていながら私たち参加者には理解できなかった。」

－「たとえば日本の歴史も広い範囲ではなくある部分に限れば印象に残るのではないか。」

－（日本についての紹介も、日本人が勤勉に努力してこのように伝統ある立派な現在の国―つまり経済大国―をつくりあげたのだというような傾向の説明は、印象良く受けとめられていなかったことが判明した。韓国の青年の立場からいえば、たとえばその昔朝鮮半島からの文化・技術などが日本にどのように伝わり、どのように開花したかというような歴史の事実を確認することにより、朝鮮半島から日本への文化的影響にも触れたかったのだが、そのような機会に接する事ができなかったことが残念であったという意見が述べられた。）

－（一般的に、受講者には、来日して日も浅く相当緊張していることなどを考慮すれ

ば、歴史の紹介も古い時代から全て説明するのではなく近代史以降程度に止め、受講者の興味を喚起するような工夫をこらすことが求められていると言えよう。）

－「工場見学や進学塾訪問は、私たち韓国人が会社の宣伝のために利用されたという印象を受けたので良くなかった。」（案内した人の説明の仕方に問題があったか、訪問の趣旨説明の不足と思われるが、日本の進学塾のありようを伝えたかったという意図は理解されていたものの、この意見は複数の青年から述べられており、かなり強い意見であった。日本では、初めての人が会社を見学したり訪問すると必ず同社の業績説明のようになるが、それがそのまま日本社会一般に会社訪問はそうしたものとしてうけとめられるが、昨年度の参加者はそれを会社の宣伝に利用されたというように理解されたようである。）

－（上記の件は、その後の会合の中で、さらに次のような説明をもって感想が述べられた）「私たちは韓国の学校の教育者であり、普通の小・中・高等学校等を見学させてもらえるのならわかるが、日本まで行って、韓国では普通の教育機関よりは低く捉えられている塾を見学するということがまず理解できなかった。プログラム全体にいえるが、学校訪問や学校教員の家にホームステイすることなどができれば、同じ職業として、関心が高く、日本の先生の生活も知ることで有意義であったと思う。」（岩国でのプログラムで学校訪問があったが、夏休みのため補習授業中でまた実験室に鍵がかかっていて入れなかったという報告もあった。）

－共通プログラムの講義の後、自由時間に2～3人でいきたい町を訪問する計画があったが、どこへ行くにも予備知識がなく戸惑ってしまった。東京や観光地、レストラン等の案内情報が欲しかった。

## ②項目 合宿セミナーについて

－「日本人と韓国人が同じ部屋で生活することにより友情を深めることができ、印象深かった。」（帰国後も日本人青年が韓国を訪問するなど交流がつづいているとのこと。）

－「主題、内容がさらに多くの分野にわたると良かった。」

## ③項目 地方研修プログラムについて

－（ホームステイについては、参加者全員がその体験を鮮やかに覚えており、すべてのプログラムの中でいちばん良く受けとめられていた。）「東京とは異なった地方に行って、情の厚さ暖かさを感じた」という意見。「日本人の生活が節約をし、素朴で、庶民的なことを感じ、数多くの経験をすることができた」という意見。「迎えた家庭の奥さんが明るく滞在を楽しいものにしてくれた」など日本人に親近感を感じたとの意見。「もしホストファミリーが学校教員であったら、さらに話題を共有できたのでは」という意見。「東京で味わった共通プログラムに対する不満などが、ホームステイですべて解消した」

という感想まで述べられた。「県の教育委員会から県の紹介、学校数、人口、面積等詳細な情報を入手でき、地方理解の上からも有意義だった。後輩達にも同様に各地方地方で出されている資料が用意されていることが望まれる」との意見。

#### 〈プログラム全体に対する意見〉

－「派遣確定から出発までの期間が短すぎる。選考されてすぐ出発という状況で準備期間がない。」

－共通プログラム、合宿セミナー、地方プログラムという全体の流れに関連して、冒頭の共通プログラムが不評であったので、日本側から、“共通プログラムで知識からの日本理解をすすめるのではなく、最初から日本の状況の中に直接にはいってもらい、体験学習をする方法はどうか”と聞いたところ、「韓国から日本に移動した直後は最初の外国訪問で緊張しているので、自然に緊張がとれていく効果からいえば、この通りの順序でスケジュールが流れるほうが良い」とのことであった。

－訪日前と後では、日本に対する考え方が変化したかどうかとの質問に対して、「心の壁がなくなった」との感想が述べられた。(ただこの発言が建前的で、夕食会の一對一の会話の中では日本人に対する警戒心・不信感が払拭されているわけではないニュアンスの意見が出ていたのは当然ともいえよう。)

－「プログラム全体に、韓国を紹介する場がなかった。韓国の生活、衣装、遊びなど身近な風俗を紹介することにより日本側が韓国に対する理解を深めてほしかった。」

－「一ヶ月という期間は長く身体的にも疲れストレスもたまる。ストレス解消の場が必要。たとえば親善バレーボール競技会といったスポーツや登山等身体を使う機会があると良かった。」

－「相互に親善を早く深めるために、たとえば言葉なしでもできるゲームや、子供の頃の遊びをお互いに紹介して友好を深めるということもできよう。」

－(日本という豊かになった国に招待してその成功をみてもらうという一方通行的な交流の企画はかえって反感をかってしまい逆効果であることが全体的に見受けられた。相互交流の色彩をもっとプログラム全般に緻密に出していく工夫が必要であると思われる。見学したい分野、知りたいことなどの希望を事前確認できれば行い、プログラムに反映させていければ招聘事業の質も高まるものと思われる。)

－(日本側からは、地方プログラムを受け入れる側は自由な企画で立案をするようになっていたために、スケジュール作成に苦労したという意見が述べられた。幼稚園、小学校、中学校訪問等何を見たいかの希望があればむしろ企画しやすい、それがなかったために観光プログラムになってしまったという意見も出た。授業の一環として教壇に立つ、諸学校訪問などもおもしろいのではないだろうか。

－(さらに日本側からは韓国側で何を見たいのか交流のスタンスを明確に示してくれ

たほうが、良いプログラムがつけれるとの意見も出た。その注文がないとプログラムが漫然としてしまう。）

－（帰国後日本に対する感情はそれぞれ変わったものの、その気持ちを国全体に広げる活動にはつながっていない様子で、数多くの参加者がいるにもかかわらず、帰国青年同窓会が組織化されていないのも理解できるものであった。）

## 二. ホームステイ実施結果

〈ホームステイ名簿〉

五十嵐章彦：朴 東根(PARK DONG KEUN)氏 1991年度教員参加者

小松 正昭：同上（予定のホームステイ先が急に都合が悪くなり朴氏宅で受け入れてくれた）

石神 澄子：李 誠子(YI SOUNGA JA)氏 1991年度教員参加者

清水 昌法：安 亨均(AHN HYUNG KYUN)氏 韓国ユネスコ国内委員会（ユース・ユネスコ・センター）職員

赤瀬 徳代：黄 善姫(HWANG SUN HEE)氏 韓国ユネスコ会員

2月13、14日の2泊ホームステイを体験し、韓国の人々の生活の一端に触れることができとても喜ばしいことであった。帰国青年も話していたが私どもも同様に、やはりホームステイが一番期待していたプログラムであった。受入れ家族の一々所で急遽都合が悪くなるというハプニングもあったが、朴氏の好意で2人を受け入れていただきその誠意に感謝するばかりである。

## (5) 調査団所感および提言

各団員の所感は次に記されてある通りである。

調査団の提言としては、下記のように記す。

「21世紀のための友情計画」の中に韓国の青年招聘プログラムを組み入れる場合、韓国と日本との歴史的事実を十分に踏まえた上で交流プログラムを綿密に組むことが肝要であると思う。韓国の人々が日本に対して抱いている複雑な感情を正しく認識した上で共通プログラムでの政治、経済、文化紹介を行うことが求められていたことを調査団全員が感じた。そのためには交流の主体である双方が相互に気軽に交流できるようなプログラムを共同作業で創ることが望ましいが、外国青年は招かれるという受け身の立場から、積極姿勢に出にくい事情もある。プログラムの作成に当って共同作業のシステムを確立すべく外国青年の募集活動を早めてもらい、訪問団の代表窓口の事前の協議ができる体制を整備することは可能ではないだろうか。

こうした協議を通じて用意が整えば、外国の青年達が彼らの国を紹介するような外国青年主導のプログラムを取り入れることも考えられる。

距離的には近いものの、心のつながり、隣国同志の連帯という面では遠いへだたりがあるといえる韓国とのあいだの関係を、本事業のような交流を積極的に促進することによって改善していくためには、十分な準備と、共通体験を通してできたグループ同志、個人間の交流を事業終了後に深めていくことで心のかげ橋を築いていくことが大切であろう。

#### 調査チーム参加者の感想

宇部ユネスコ協会 五十嵐 章彦

今回の韓国訪問は私にとっては2回目で、前回は1971年の秋だった。当時は朴大統領の時代で軍事色が強く、日本に比べてとても暗い国という感じを持ったのを覚えている。今回の訪問での印象を一口で述べると、あれから21年の歳月を経て韓国という国が活気を帯びた明るい国に変わりつつあるということであろう。

今回は首都ソウルに滞在したのみだが、高層ビルが立ち、人々の表情は明るく、若者の服装もファッションブルなものに変わっていた。町中における自動車の洪水には特に驚かされた。その自動車も概してへこんでおらずペンキも剥げず手入れが行き届いており、韓国の経済・工業力の進歩と生活レベルの向上を感じさせるに充分だった。さらにソウル郊外で高層アパートの林立する様と大規模な工業地域造成工事を目にして、この国の活力を感じた。このような発展のさなかにある韓国も、隣国日本との和合という面で考えると必ずしも良好な関係となっているとは云えないのではなかろうか。

短いソウル滞在ではあったが、一通りソウルとその近郊を巡り、帰国青年を含め韓国の人々にも接することができ、ほんのすこしではあるが韓国理解と相互交流の成果があったと思う。この年齢で初めての経験であるホームステイは良き思い出と共にホストファミリーの暖かい心配りに感謝したい。

私のホームステイ先は、一昨年夏に青年招へい事業により訪日し我が家にホームステイされた朴東根氏のお宅であった。ギブ・アンド・テイクといえればそれまでであるが、おそらく朴さんがためらうことなく私を選んでくれたことをとても嬉しく思った。

彼を迎えたのは真夏、エアコンもない我が家では扇風機のみが涼を与える術で、日本の蒸し暑さに閉口されたことと思う。彼は高校の先生、私はごく普通のサラリーマン、このため職業面での共通の話題がなく、ホームステイ先で彼が期待したであろう日本の高校教育に関する話あるいは教師としての楽しさ・悩み等について何も話すことができなかったのは残念だったと思う。しかし、高校3年生と1年生の息子二人が彼の話し相手となり、また昼間は高校野球の地区大会を下関球場で一緒に観戦し、さらに夜は地区の夏祭りがあり私が息子の高校の補導委員だった関係で朴さんを同伴して付近をパトロールした。これらのことが、日本の家庭にホームステイした高



校教師の彼にとって何らかの収穫になったのではないかと内心想っていた。

今回彼の家にホームステイしたのは真冬であり、真っ先に感じたのはオンドルの暖かさだった。オンドルのことは以前より知ってはいたが実際に体験するのは初めてである。彼はアパートに住んでおり、アパートの全部屋にこのオンドルがあるそうである。足元から暖まる快適さは素晴らしい。さらに感心したのは、日本のアパートのベランダはオープンで吹きさらしなのに、こちらではベランダの外側にも窓ガラスが付いていたことである。ベランダはまさにサンルームで、これも寒い地域に住む人々の生活の知恵であろう。朴さんは中学校の先生をしている奥さんと二人で住んでいる。6才と2才の二人の子供がいるが大田に住んでいる両親にあずけており、2週間に一度子供の顔を見に両親の元を訪れているようだ。

韓国人の思想や生活習慣には儒教精神が大きな影響を与えているということを聞いていたが、朴さんの家庭に入ってみると清潔で質素な生活ではあるが、礼儀正しく客をもてなす心配りを感じた。同じ訪韓メンバーの小松氏のホームステイ先が急に都合が悪くなるというハプニングがあったが、朴さんが彼も引き受けてくださりその誠意にとっても感謝している。急に二人の客を迎えることになり食事の準備等で奥さんにも大変な迷惑を掛けた。

休日には、朴さんと小松氏それに私、さらに石神さんおよびそのホストファミリーの李誠子さんの家族と一緒に、水原の近くにある韓国民俗村までドライブした。民俗村はその名の示すごとく韓国の古い民俗様式を一ヶ所に集めたものである。農家・民家・工房・鍛冶屋・役所・市場等が設営されており、土間やカマドあるいは農耕具など日本でもほんの少し前まで田舎にあったようなものが展示されていた。建物をはじめ道具類は日本のものととても良く似ており日韓両国が民俗様式の面でかなりの共通性を有していることがうかがえる。当日は晴れの暖かい日であったにもかかわらず民俗村の中を流れる川は凍結し、大勢の子供たちが氷の上で遊んでいた。やはりこちらの冬の寒さが厳しいことを感じた。

日本にとって韓国は「近くて遠い国」と言われることがある。21年前の訪問時この言葉を何度か耳にし、行ってみてやはりそうだとの感触を持った。それからかれこれ四半世紀経った今回もこの感じを拭うことができなかつたことはとても残念でならない。韓国で面談したのは、地位・学歴・教養の面でそれなりのレベルの人達ばかりであり、ミーティングの場で日本あるいは日本人に対する悪い感情や不信感等を耳にすることはなかった。しかしながら一対一の場で話しを向けると、日本が過去にしたことに対する怒りや不信感のため、日本人との少しの交流程度ではこれらをなかなか払拭できないというニュアンスの言葉が出ていた。

韓国が独立を達成するまでの苦難の歴史を展示している独立記念館を訪れた時、日本の残酷さをどぎついと言っていいくらいの表現で展示されているのを見た。このような展示物を小さい時から見せられさらに日本はまた日本人はこんなに悪く残虐なのだと教え込まれたとすると、成人となってもより広い視野からまた公平な見方で日本を見ることは到底期待できないと思われる。もちろん文禄・慶長の役ー豊臣秀吉の朝鮮侵略および韓国合併後の35年にわたる植民地支配に

において日本が韓国に与えた多大の迷惑や悲惨な行為、そして今も残る強制移住による離散家族の悲劇・破壊の傷痕・慰安婦問題等各種の傷痕を否定するつもりはない。

今を生きる我々としてはやはり現実の世界をより良いものとし、未来を希望に満ちたものとなるよう努力するべきであろう。そして次代の人々に明るい社会を引き渡す使命があると思う。このように考えるとき日韓両国の協力は当然であり、国際理解・国際協力という言葉も意味を成してくる。いたずらに過去のしがらみにこだわりをもち続けることは得策ではないと考える。北朝鮮との関係で国民の一体感を生み出すための手段として反日感情をあおらざるを得ないのだろうか。私としては歴史的事実を冷静に表現することに反対はしないが、韓国の現在のやり方は少し過激だと思う。

この文章を書いている時、たまたまNHKのテレビで「空白の半世紀・韓国離散家族の長い旅」という番組をやっていた。これを見て私の考えも少しゆらいできた。やはり韓国特に人生の大半を日本のために浪費あるいは失った韓国人に対して、日本ができる「つくない」について我々日本人は真剣に考え行動する必要があるのではないかと。

歴史的な背景を踏まえた韓国人の日本に対する特別の感情あるいは不信任感、今も本音の部分で韓国人の心の中に消えることなく存在していることを、我々日本人は忘れてはならないと思う。従って、韓国の人々の感情やプライドを刺激するような思慮分別のない言動・行為は慎むべきと思う。

今回の韓国訪問に関してかなり厳しい感想を述べたが、21年前に感じた「近くて遠い国」の印象が今回も変わらなかったことに寂しい思いがする。このような両国いや両国民の関係を少しでも早く解消すべきである。そのためにはまず各層レベルでの人的交流を促進し多くの心と心のかけ橋をつくる必要がある。そうすれば相互理解が進み疑惑・不信が除かれるのではなかろうか。

朴さん夫婦を始め私達が接触した韓国の人達は皆礼儀正しく心の優しい隣人であった。彼等との交流を続け、さらにこのような交流の輪を広げる努力が私達アフターケア調査チームの今後の使命であろう。

#### 隣国見聞の記

(財)秋田県国際交流協会 小松 正昭

##### 1) 発展する国

めざましい発展を成し遂げて来た韓国経済は、“漢江の経済奇跡”といわれる高い評価を受けている。

国の発展の態様は、良きにつけ悪きにつけ、首都に集中するのが通常だが、韓国の場合もそ

の例外ではない。発展の息吹きといえばそれまでだが、首都ソウルの雑踏ぶりはすごい。経済発展は、一方で急激な人口の都市流入をもたらし、ソウルの人口は1,100万人、韓国の全人口の4分の1を集める。

こうした人口の都市集中は、都市地域の住宅問題と農村地域の過疎化といった発展のアンバランスにもつながる。

それにしても、夜間の飲食街に若者の多いことには驚かされる。25歳以下の青少年が総人口の50%以上を占めるというから、当然のことかもしれないが、韓国の活力は若い世代が多いことにあると合点した。

ソウルから郊外に向かうハイウェイの沿道は工事現場が続く、そのほとんどが住宅建設とのこと。ソウルから車で1時間の通勤圏に、高層アパート群が乱立する様子には圧倒される。通勤圏は、ソウルオリンピックを契機に、漢江の対岸に拡大し、地下鉄網も備わって、通勤体系も整ったかに見えるが、通勤手段は相変わらず自家用車が多い。早朝から始まって、夕刻遅くまで続く通勤時間の交通渋滞は、相当なものである。

我々も、いつか辿った道だろうが、発展とは、経済優先で突っ走ることのようだ。人々の意識もこうした流れに乗り遅れまいとの一念のようで、核家族化、マイホーム主義のすう勢に順応しているようにも見受けられる。

## 2) 国民統合の象徴

韓国の国家意識を象徴するものに独立記念館がある。いや、これは、むしろ国民統合を意図する政治的象徴物というべきかもしれない。

先ずその敷地の広大さに圧倒される。解放記念塔から解放の門を経て、数々の民族の歴史、文化等展示館に至って、背後に連山をいただく様は、城塞の構図そのものである。

偽らざる第一印象は、「今更何でこんなものを？」である。合理性・効率性の感覚に慣らされた人間には、こうした巨大な建築物は、不合理かつ無駄使いの象徴としか映らない。

しかし、正に不合理故に、その裏に意図するものを強く感じる。それは、超巨大な解放の門の彫刻から始まって、一連の日本軍支配下、36年の悲惨な展示の数々によって明らかだ。

韓国併合に始まる日帝支配の36年は、韓国民にとって、屈辱の歴史である。この韓国民の心に等しく共有される現代史の一時期を、国民統合の共通の原点とし、国家意識を醸成しようとしているように読みとれる。むろん南北に分断された北の存在を意識し、自らイニシアチブをとって朝鮮半島を統一することへの布石でもあるように、思いが自然に巡ってしまう。

いずれ、日本が悪者であるという教育は、韓国ではかなり浸透しているように見受けられる。その徹底ぶりは、そうした教育を受けた教育現場の教師も認めるところである。

独立記念館の敷地内には、池をはじめ公園施設も整備され、娯楽設備さえ併設されている。行楽地といった装いの中で、遊び、楽しみながら国民統合といった意識の高揚までねらったこうし

た施設は、正に国家優位の社会を証明するものであるかもしれない。

### 3) 光と影の民

政治の極が独立記念館にあるとすれば、文化の極は民俗村にある。

1974年、韓国固有の文化や伝統を保存するためにつくられたという民俗村は、30万坪の敷地に、300年前の朝鮮朝時代の人々の生活様式を再現してくれる。

平野から細長く山間に入り込み、中央部に沢水を集めた川が流れる地形は、正に村落形態を形成するにふさわしく、見学順路を進むうちに、どこかの村落を徘徊しているような錯覚を覚える見事さだ。

ここには、両班の家々と書院、農家や一般民家も北部、南部各々の地方の特徴が見くらべられる。

突然、民俗服を来た一団が現われ、ゆっくりと遠去っていく。白を素地にした、赤・黄・緑などの原色に近い艶やかな装いとなる民俗服は、正に、見る者を魅了する。

チョゴリ(上着)とゆるやかなバジ(ズボン)からなる男性の民俗衣装、カラフルな女性衣装のチマ・チョゴリ、それに土から生まれたような仮面をつけての民俗踊には、民族のルーツへ誘いを感じる。

韓国国旗の太極旗の中心部は、国民を意味し、赤が“陽”青い部分が“陰”を表し、更にそれは、火と水、昼と夜、明と暗、男と女、動と静などの融合・調和を象徴するとか。

つまりは、光と影の折りなす世界が韓国民俗の文化的基調ということか。鮮やかな色と奇怪な面、月夜の陰影に、静寂を愛する草原の民、民俗ルーツへの空想はこんな展開になった。

### 4) 日韓の掛け橋を担う者

田中実氏29歳、今回の訪韓時の通訳。現在、ソウル市内の大学で韓国文学を専攻とする博士課程の学生、在学期間は5年に及ぶ。

落ち着いた雰囲気をも有し、韓国への長期滞在という背景もあって、初対面から、その生き方、考え方に関心があった。

奈良県出身、1988年のソウルオリンピックを契機に、将来、朝鮮半島との関係が重要になるとの判断から、天理大学で韓国文学を選択する。同大学卒業後、現在の大学に留学し、本場で韓国文学の研さんを積む。研究テーマは、「日帝支配36年の中で、日本語を強要された7年の空白期間における韓国文学」である。

文学とは作品を通して、人の生き方を問うものと理解され、創作活動に様々な制約が加えられたこの空白期間の文学は、どのようなものであったのか関心のあるところだ。答えは、他の歴史でもみられたように、風刺が多いとのこと。

彼は、韓国のOLと結婚し、娘さん一人をもうけている。本国からの仕送りがままならない中

で、彼を支援してくれたのが奥さんとか、現在もこのパターンを生計のベースにし、時折、彼の通訳収入で手助けしている様子。「最近、自分もかなり韓国人になりつつある。」という彼も、根は日本人。日韓関係の様々な事象・曲面の中で、日本の対応の変化が一番気になると言う。現在、生活の場を共有する韓国同胞の幸福を願いつつ、これが母国との友好的関係の中で、実現されるを念じている。

ひと口に友好の掛け橋というが、その実体を担うのは、こうした現地の人間と生活を共有する人間に違いない。とりわけ、不幸な過去を有する日韓両国の関係の中で、韓国社会は、日本及び日本人に厳しい心眼を注いでいる。そうしたシビアな環境の中で、唯一生活の共有こそが偽らざる人間交流として、相互に許容される実相であると想像される。

特殊環境の中で、様々な葛藤の連続にこそ、掛け橋の現場があるに違いない。半ば日韓両国人といった中で、自ら問題意識を高揚させ、時に異文化を楽しみ、将来に思いをはせるかのような彼の存在に拍手を贈りたい。

#### 5) 相互理解のために

2月25日、韓国では金永三氏が初の文民大統領に就任し、新たな第一歩を踏み出した。今回の訪韓でも目の当たりにしたが、お役所入口での厳しいチェックに代表される、あのピリピリした雰囲気は改善されるだろうか。1週間足らずの滞在期間中の新聞報道でも、対北朝鮮と日本に関する記事は、先ず欠けることがない。

今、最大の関心事は、北に向かっては国際核査察機関（IAEA）の受入れだし、日本については、自衛隊の海外派遣と国連常任理事国入りを巡っての、日本の軍事大国化への懸念である。

東西ドイツの統合が成り、朝鮮半島の統合への期待もふくらんでいるが、南北の経済較差や政治体制の相異、更には、半島を取り巻く周辺諸国間の関係などから道は相当に険しいと予想される。但し、これが実現された時点での状況を考えれば、我々にとって計り知れないインパクトが想像される。

実は、自分にとっても韓国は「近くて遠い国」「特別な国であるが判らない国」であったが、この訪問によって、その存在と位置が実感できる「隣国」であることが確認できた。

日本人の本音は韓国ギライ、韓国人も日本人ギライが一般的だろう。両国は地理的にも近いし、人種的にもつながっている。両国人はお互いに似ており、つながっているからこそ、かえってギライなのかもしれない。つまり「近親憎悪」を基調とする関係なのだ。

加えて、こうした関係を更に助長しているのは、過去の不幸な歴史である。しかも、日本が加害者で、韓国が被害者という図式の中で、一層の頑なな状況にある。

多分、解決への道は、こうした双方の心情を形にはめないで、ホンネの交流から始める以外にないのかもしれない。むしろ、その前提として、我々日本人は、過去の事実を反省し、これを忘れないことだし、韓国人にとっては、過去の事実のみにこだわらないことだろう。

愛と憎しみは、紙一重と言うが、正に感情の糸はもつれ合って、なかなか解けないのである。

互いに協力し合って創造する未来のためには、人的交流をキメ細く積み上げるしか方法がないことを実感した次第である。

#### 韓国での想い

(社)日本ユネスコ協会連盟 石神 澄子

この度の「アフターケアチーム」で韓国を訪れたのが私にとって初めての訪問だった。国外旅行をはじめたのが1972年であったことから考えれば、これまでの12年間にただの一度も訪れていなかったということは本当に恥ずかしい限りである。短時日のなか訪問したなかでも特に独立記念館、安重根記念館、そして帰国青年との会話を通して、自分の頭のなかで知識としては理解していたつもりであった韓国と日本の歴史の事象が、滞在の日を一日一日重ねていく毎にじわじわと実感を伴って埋められていった。従軍慰安婦の問題で大使館前でデモがあったこと、伊藤博文を殺害した安重根は民族の解放をもたらそうとした国の三大英雄の一人であること、日帝支配時代に徹底して行なわれた創氏改名、日本語教育など文化面での統治策がどれほど厳しいものであったか、いまは国立博物館となっている旧日本総督府の壮麗さに伺いしれる支配権力の誇示、また徴兵、徴用、強制労働による家族離散等々、さまざまな情報を通して触れた歴史的事実の前に心が重くなるばかりであった。日本で認識していた歴史と全く反対側の歴史の視点が韓国にはある。そしてこの懸隔が非常に根深いことを痛感した。ズレの原因が透かし彫りのようにみえてきた。韓国訪問をした日本人や、韓国の研究をしている日本人、日韓交流をすすめている多くの日本人には、既に旧聞のことが、今回の訪問で直接韓国人から生々しく語られる度に、韓国の人々に強烈に残る反日感情が当然のこととして良く理解できたし、自分の無知を恥じ入るばかりであった。しかし、成人日本人の何割がこうした韓国併合の事実を正確に受けとめているかどうかおぼつかないことではないだろうか。情報量が圧倒的に少ないことが最大の課題と受けとめられた。

家庭滞在中でお世話になった家は夫婦とも学校教員で子供二人の四大家族であった。奥様の母上は16才まで大津市で育ち、日本語をよく話され日本に多くの幼なじみや友人を持つ親日家である。滞在中言葉が通じなくては困ると、娘さんからの依頼で私のお相手役として泊まりにきてくださった。日本人相手のツアーガイドをしておられるが、ツアー客のほとんどは独立記念館、安重根記念館などは訪れないことを語っていたが、当然の傾向であろう。しかし、ドイツが第二次世界大戦でおこなった残虐な行為をきちんと次世代に正確に伝える努力を教育や歴史的展示等を通しておこなっているのに較べて、日本の対策には問題があるといわざるを得ない。

家庭滞在をして中国と日本との間に見いだした多くの共通した点と同質のものを、韓国の生活のなかでも発見した。日本のテレビ放送も流れてきており、日本の情報は日本が韓国から受けとめる量と反比例してかなり多いこともわかった。アジアの中の日本はアジア諸国との友好関係を築くことが最優先課題であろう。とりわけ韓国とは過去の不幸な歴史を認識し、心を通いあわせることのできる友人をつくっていくことであろう。11年前共に外国で学んだ韓国女性から多くを聞いていた国に初めて訪れ、今度は訪問時に紹介された二冊の本を読みはじめている。韓国の学習はいまはじまったばかりである。そうした機会をあたえてくださった関係各位に深く感謝いたします。

防府ユネスコ協会 清水 昌法

2月13日(土)、韓国に来て既に3日が過ぎ今日は、待ちに待ったホームステイの日です。ホームステイ家族とは午後ホテルのロビーにてお会いするため、午前中は調査団員全員でソウル市内にあるミッション系の私立慶福女子商業高等学校を訪問しました。学校では、金順宗校長先生を初め教頭及び日本語担当の先生の出迎えを受け、大変恐縮いたしました。その後、彼等と約1時間にわたり学校の概要や日本語の授業内容等についてお話を聞かせていただきました。校長先生からは、この学校は、北海道の旭川にある高校と姉妹校の縁組をしていたため、お互いに先生を中心とした交流がおこなわれていると説明がありました。又、日本語担当の先生は、「21世紀のための友情計画」について、以前この事業に参加したために応募をしたことがあると話しておられました。しかし、応募者が多いため希望が叶えられなかったとのことで、少し残念そうに話しておられました。その後、学校の施設を見学させていただきましたが、生徒が約4千人近く在学しているためかなりの規模でした。

ホームステイ家族とは午後ホテルにてお会いしました。私をお世話して下さったのは、ソウル市内から車で約2時間の利川市にお住まいの安亨均さん一家(奥さんと長女と長男の4人)でした。彼は、韓国ユネスコ協会の職員で、同協会が運営する利川市にあるユネスコ・ユースセンタに勤務しています。

私にとってラッキーだったのは、ホテルでの挨拶の時に彼が私に日本語で話掛けてきたことです。これによりホームステイに対する緊張感が一度に飛んでいきました。

安さんの車は、家族と共にソウル市郊外のロッテデパートの大駐車場に駐車しているため、2人でホテルを出て地下鉄へ乗っていきました。家族全員でデパートで簡単にショッピングを楽しみ、車で約2時間の道程を帰宅しました。

安さんの家に着いたのは、その日の夕方6時すぎでした。その後、奥さんの手料理による食事をいただきました。私は、韓国の料理は辛口だと聞いてはいましたが、安さんの家庭料理は、我

が家と同様の薄味でしたので大変おいしく食べました。又、子供はどんなものを好んで食べるのかなと思っていると、我が家の子供と同様、味噌汁と御飯を好んで食べていましたので、私は、安さんに子供についてのお話をいろいろ聞きました。それによると、子供は漫画・TVゲーム・ガムやお菓子などが非常に好きなようでした。事実漫画がTVで始めると2人の子供ともTVの前で静かに見ていました。これまた、我が子と変わらないというよりも、子供は皆一緒のような気がしました。

私にとって2度目のラッキーだったのは、私の友人の話では、あちらの人は良くお酒を飲むので潰されないよう気をつけて下さいとの事でしたので、酒の弱い私は、食後にお酒を進められたらどうしようかと一人心配していました。しかし、彼は、私同様にお酒は余り飲まないとのことでした。おかげで、食事後、2人共ささやかにビールを飲みました。

8時から、安さんの奥さんが大変好きなドラマを家族皆で見ました。このドラマは、「息子と娘」と言い、内容は双子の兄妹がいて、同じ条件でこの世に生まれながら息子は跡取であるため大切に育てられ、娘はそうでないため兄とは違った人生を歩んでいくと言った、俗にいう人情ものであります。このドラマは、儒教の思想が根強い男性が女性よりも大切にされる今の韓国社会を反映した番組内容であるためかも知れませんが、韓国内では今一番人気のある番組だそうです。おかげで人情もののドラマであったため、ハングル語の理解できない私にでも、このドラマについて、安さんから簡単に説明を聞いただけで、けっこう楽しく見ることができました。ひょっとして、同様に人情ものの好きな日本人の間でも人気が出るのではないかと思ったりして、ある意味での、日韓の共通点を見た思いがしました。

次の日は、家族全員と私との5人で利川市から車で40分のところにあるファーム・ランド(遊園地)に遊びに行きました。ここはソウル市からも比較的近いので若いカップルや家族連れがたくさんいました。ここは韓国内でも比較的大きな自然の山を利用した遊園地ではなかろうかと思いました。さすがに北国であるため遊園地に簡単なゲレンデが3か所あり、子供達と私たち大人は別れてそこでソリを滑りました。私は、ソリをするのは久しぶりであり何回も滑りすぐに時間がたちました。

このようになんだかんだとしてる間に、ホームステイも最後の夜となり、夕食は利川市の中華料理店にて外食しました。この時にふと思ったのが、韓国の料理といえば焼肉ではないかと思い、一般家庭でも肉は頻繁に食べているものと思っていたけど、あくまでもこの家庭を見る限りにおいては、菜食主義であることに気づきました。また魚は、この国ではけっこう高価であるとのことではなかなか食べれないとこちらに来て知りました。

もしも、韓国の人が野菜をたくさん食べるのであれば、これまた食事の面でも日韓の共通点があるところを見た思いがしました。この様に、色々発見するとおもしろくなりもう2・3日滞在すればまだまだ見付けられるのではないかと思います。

その後、8時には帰宅し昨日と同じ「息子と娘」の1時間ドラマを家族皆で見ました。私はドラ



マが終わった後、その日の遊びの疲れが出たせいもありすぐに寝ました。

私の部屋は韓国式のオンドルでしたので、凄く暖かく快適さはバツグンでした。おかげで、この2日は気持ち良く寝させていただきました。

ホームステイ3日目の朝、この日は、安さんの長女の幼稚園の卒業式であり、車は奥さんが使用するため、私と安さんの2人は利川市からソウル市まで高速バスにて移動しました。約1時間の車中で、安さんといろいろ話をし、彼の人柄がある程度理解できたかと思います。

私は、彼を3日間見てきましたが、性格はおとなしく几帳面です。それに、一番関心をしたのが家庭で奥さんの手伝いをしていること、それと、子供と良く遊ぶことでした。日本よりも、男性上位社会であるこの国でこれほど家庭的な人がいるとは思いませんでした。これにより、「人の振り見てわが振り直せ」との言葉をふと思い出しました。

おかげでこの方は、私の描いていた韓国人像とはまた違うところが分かりまた自分が人から聞いた話で韓国人はこれだと決め付けるのが間違いだという事が分かりました。

良く日本でも言われますが、「うわべだけでものを見ては行けない。」「噂や、外見だけで人を判断してはいけない。」との言葉が人と人との付き合いの基本ではなからうかと感じたわけです。

今回、韓国を訪問してみて思ったことは、とかく日帝時代の影響が強く残っていることです。どこの史料館・博物館に行っても「日帝時代」「日帝時代」これでもか、これでもかというように資料を展示しています。それほど彼等に強い印象を与えた時代とは、どんな、時代であるのか興味湧き、帰国して何冊かの本をすでに読んでいるところです。

最後になりましたが、今回このような機会を与えてくださったJICA及び現地でお世話をさせていただきました日本大使館の皆様には深く感謝の意を申し上げ今回の報告を終わります。

光ユネスコ青年部 赤瀬 徳代

私は今回で3回目の訪韓でした。そして、今回一番の不安はホームステイでした。私は韓国の方を含め、ホームステイを引き受けたことはありましたが、自分がホームステイをするのは、初めてであり、特に、言葉の問題が大きな悩みでした。日常会話程度の英語は話せるものの、私の拙い英語がどこまで通じるか、また、英語が話せる人がいるかどうか、ホームステイ先の情報が全く入らないため、不安のまま日本を出発することになりました。成田から金浦空港に到着し、日本大使館の西尾さんの出迎えを受け、私達のスケジュールが、始まりましたが、韓国の暖かさにはびっくりしました。最低気温が零下7度などと聞いていたのが嘘のようでした。後から聞くと、韓国の方々もこの気候には、驚いているとのことでした。

帰国青年との交流会では、91のプログラムで山口県に来られた教員の方で設定していただき

ましたが、光でお世話をした方々の姿はなく、少し残念な気がしました。しかし、話をしてみると、同じ山口県のユネスコメンバーの家庭にホームステイした方もおられ、訪日されたときのことについてを聞くことが出来ました。訪日する前と後では、特に家庭において、自分たちと同じような生活をしているとのことで、考え方が変わったとのことでした。そして、日本で出会った方々とは今でも交流を続けており、またホームステイの家族を訪ねて行きたいとお話でした。実際にこのときは一人のお話ししか聞くことが出来ずに残念だったのですが、少しでもこのように日本人に対しての考え方を良い方向に変えて行くことが出来、お世話をする方としては喜ばしい限りでした。

一番不安だったホームステイ先は、韓国に来てから判明しました。3名は、'91に来られた教員の方で、ソウル近郊の方でした。2名はユネスコメンバーで、市外の方とのことでした。私の引き受け先は、仁川直轄市に住むユネスコメンバーの方でした。しかし、言葉の問題、家族構成などは全く不明で、不安でいっぱいでした。しかし、前日に私はソウルにいる友人と会う機会を持つ事ができ、ホームステイ先の方の情報を得ることが出来ました。その結果、88'に韓国ユネスコ主催の行事で日本に訪日され、光市にも来られた方でした。その時、私の家にホームステイはされていないのですが、同じユネスコメンバーの家にホームステイをし、交流をした方でした。名簿に載っていたのは、奥さんの名前、私が知っていたのは、ご主人の方だけでした。改めて、韓国の姓制度（結婚しても夫婦別姓）というのを実感させられました。

孫春錫先生の自宅は、ソウル市から車で1時間の仁川轄市の高層アパートでした。しかし、彼の職場は利川のユネスコセンターで、自宅から車で1時間30分かかるところにあります。そのため、遅くなる時には、ユースセンターに泊まることもあるそうです。今回、私をホームステイするのを楽しみにしていたというのを聞き、嬉しく思いました。渋滞に巻き込まれ、実際に家に着くのに、1時間30分かかったのですが、光市に来られた時の思い出などを話していたため、短く感じられました。

家族は、4人家族で、長女の孫志旻氏は、2月17日が小学校の卒業式ということでした。今度中学生になるからと、英語を勉強していました。しかし、理解はできるが話すことがままならなく、直接対話することが出来ませんでした。長男の孫亨坤氏は、小学校の低学年であり、まだ英語は全くわからない状況でした。奥さんの黄善姫氏は少し英語が話すことができ、また日本語も勉強しているとのことで、会話は無理なのですが、読むことはでき、とても美人の奥さんでした。会話は主に、孫春錫先生と黄善姫氏とで話し、子供達とは通訳を交えての会話でした。また、話す言葉も孫春錫先生も少し日本語を覚えているということもあり、英語あり、韓国語あり、日本語ありという状況でした。

初めて韓国の家庭にホームステイをし、日本との違いを感じたことがいくつかあります。それは、まず日本では、食事をしながら晩酌をします。韓国では、通常の家では、先に食事をし、後片付けをした後、晩酌をするのです。このようにすると、量をたくさん飲まないからだ、とい

うことでした。

次に、水です。日本では水道からの水を直接飲むことが出来ます。韓国では、飲める地域もありますが、全く飲めない地域もあるのです。この仁川直轄市がそうでした。水道水は、洗い物をするときや、お風呂などで、飲むためには全く使用出来ないのです。彼の場合はミネラルウォーターを、利川のユースセンターから運んで来るそうです。そのため、子供たちは水が欲しいとき、まず親に“水が欲しい”と言い、親がコップに水を汲んで与えます。彼らにとって、水は貴重な生活必需品なのです。

そして、家というものを大切にしているということです。ほとんどの家庭には、家訓というものがあろうです。日本では、家訓のある家庭は珍しいと思います。現在では、昔と違い韓国でも核家族化してきているようですが、家を大切にするという精神は変わっていないようです。そのため、夫婦別姓というのがあるのだと思います。

現在、韓国も日本と同じように受験戦争というのがあります。ここの家庭でも例外ではなく、テレホンイングリッシュサービスを利用して勉強していました。

ホームステイは2泊3日という日程でした。

まず、1日目は、私はお土産を買いたかったので、デパートに連れていってもらいました。改装記念ということで、バーゲンをしていました。こういうのは、何処でも同じなと、思いました。中身も日本と変わりなく、違和感を感じることなく、むしろ親しみさえ覚えました。そして、夕食は、私がいかに辛いのを食べれないということもあり、特別に作ってくれて、とても嬉しく思いました。夕食後、日本の双六に似た子供の遊びをやって楽しむことが出来ました。そして、孫春錫先生と黄善姫氏の結婚式の写真、家族旅行の写真、彼が日本に来た時の他のメンバーとの写真などを見せてもらい、懐かしく思いました。そして、日本と韓国との婚約式、結婚式の違いについて聞き、改めて日本と一番近い国でありながらの違いについて、勉強することが出来ました。

2日目は、港に連れていってもらいました。ここは、干潮時と満潮時の差が激しく、平均で7メートルぐらい違うそうなのです。話を聞いたときは、実感としてわからなかったのですが、実際に干潮時の状態を一部で見ることができ、驚きました。本当に船が陸に上がっているような状況なのです。海は、はるかかなたにあり、奇妙な光景でした。

そして、魚市場に連れていってもらいました。とても広い場所で、たくさんの店が所狭しと並んでいました。この仁川に住む人たちが買い物に来るところで、ソウルと違い日本人の観光客はいなく、お店のおばさんも日本語は話せないようでした。そして、この市場では、食事も出来るようになっていました。新鮮な魚の刺身や鍋などを食べる事が出来ました。このときも、あまり辛くしないようにとお店の人に言ってくれて、感謝の気持ちでいっぱいでした。

そして、マッカーサー元帥が、仁川上陸を敢行、ソウルを奪還したのを記念しての自由公園に行きました。ここには、マッカーサー元帥の銅像、そして、韓国と北朝鮮の生活用品などが置い

てあり、違いを見ることが出来ました。見ていると、韓国はほとんど日本と変わらない生活用品のように思いますが、北朝鮮は全く違い、文化の発展の違いを見ることが出来ました。

最後に私達は、また韓国で、そして日本での再会を約束して別れることになりました。

こうして私のホームステイ体験は終了したのですが、孫春錫先生と家族の皆さんには感謝の気持ちでいっぱいです。彼は、今度は家族で、日本に来ることを希望しており、その時は今回受けた気持ちを精一杯お返ししたい気持ちでいっぱいです。そして、私は再び韓国を訪れたいと思っています。次回はもっと韓国語を勉強して、ぜひ韓国語で話したいと思います。

今回忙しい中いろいろとお世話していただきました、日本大使館の一等書記官西尾典真さん、通訳をお引受け下さいました田中さん、その他たくさんの方々にお世話になり、ありがとうございました。







JICA